

『全五代詩』にみえる絵画関連資料 2

Texts Related to Paintings in *Complete Five Dynasties Poems (Quan Wudai Shi)*

Haruka Takenami 竹浪 遠

表 『全五代詩』にみえる絵画関連資料 (続)¹¹

〔前蜀〕 張格 (? ~ 927) 卷 40

字は承之。又の字は義師。河間（河北省）の人。唐の宰相の張濬の子で、昭宗に仕えたが、天復三年（903）に父が政争で暗殺されると、蜀の王建のもとに逃れた。翰林学士から、中書侍郎、同平章事となり、右僕射、太傅を加えられた。『旧唐書』179 張濬伝。『旧五代史』71。『十国春秋』41。『全唐詩』760。

1	卷 40	寄禪月大師	龍華咫尺断来音、日夕空馳詠徳心。 禪月字清師号別、 寿春詩古帝恩深。画成羅漢驚三界、書似張顛直万金。 莫倚名高忘故旧、曉晴開歩一相尋。	禪月大師（貫休） 画成羅漢驚三界。	全唐 760
---	------	-------	---	----------------------	--------

〔前蜀〕 周庠（詳）(855 ? ~ 920 ?) 卷 40

許州（河南省）の人。唐末に龍州司倉參軍を務め、後、王建に仕えて御史中丞、中書侍郎、同平章事などに任じられ、王衍が即位すると司徒となった。『十国春秋』40。『全唐詩』760。

1	卷 40	寄禪月大師	昨日塵遊到幾家、就中偏省近宣麻。 水田鋪座時移画、 金地譚空説尽沙。傍竹欲添犀浦石、栽松更碾味江茶。 有時捻得休公卷、倚柱閑吟見落霞。	禪月大師（貫休）	全唐 760
---	------	-------	---	----------	--------

〔前蜀〕 王鐸（生没年不詳） 卷 40

字は鱸祥。天復年間（901 ~ 04）に蜀に使い、唐末の乱を避けて留まり、前蜀に仕えて翰林学士、御史中丞から中書侍郎、同平章事を歴任した。『新五代史』63。『十国春秋』41。『全唐詩』760。

1	卷 40	贈禪月大師	長愛吾師性自然、天心白月水中蓮。 神通力遍恒沙外、 詩句名高八米前。尋訪不聞朝振錫、修行惟説夜安禪。 太平時節俱無事、莫惜時来話草元。	禪月大師（貫休）	全唐 760
---	------	-------	---	----------	--------

〔前蜀〕 盧延讓（生没年不詳） 卷 40

字は子善。范陽（河北省）の人。光化三年（900）の進士で、武貞節度使の雷満に仕えたが、その没後は王建のもとに行き、水部員外郎、給事中を経て、刑部侍郎に至った。『十国春秋』44。『全唐詩』715、870、885。

伝	卷 40	郭熙画意、延讓雪詩云、渡水蹇驢双耳直、避風羸僕一肩高。	郭熙画意	郭熙『林泉高致』 画意
---	------	-----------------------------	------	----------------

〔前蜀〕 韋莊 (836? ~ 910) 卷 41 ~ 44

字は端己。京兆杜陵（陝西省）の人。韋応物四世の孫。若くして長安、洛陽、越中、江西、湖南、湖北などを遊歴した。乾寧元年（894）、進士に及第し、左補闕などを務めた。天復元年（901）、入蜀して王建に仕え、前蜀の宰相を務めた。『十国春秋』40。『全唐詩』695 ~ 700、892。

1	卷 41	乞彩牋歌	浣花溪上如花客、綠閣紅藏人不識。留得溪頭瑟瑟波、潑成紙上猩猩色。手把金刀擘綵雲、有時翦破秋天碧。不使紅霓段段飛、一時驅上丹霞壁。蜀客才多染不供、卓文醉後開無力。孔雀銜來向日飛、翩翩乍折黃金翼。我有歌詩一千首、磨礱山岳羅星斗。開卷長疑雷電驚、揮毫只怕龍蛇走。班班布在時人口。滿袖松花都未有。人間無處買煙霞、須知得自神仙手。也知僂重連城壁、一紙萬金猶不惜。薛濤昨夜夢中來。殷勤勸向君邊覓。	〔文房具〕 彩牋	全唐 700
2	卷 41	和友人	閑門同隱士、不出動經時。靜閱王維畫、閑翻褚允棋。落泉當戶急、殘月下窗遲。却想從來意、譙周亦自嗤。	王維畫	全唐 696
3	卷 44	金陵圖	誰謂傷心畫不成、畫人心逐世人情。君看六幅南朝事、老木寒雲滿故城。	金陵圖	全唐 697
4	卷 44	垣山山中尋李書記山居不遇留題河次店	白雲紅樹岢嶇（一作繞琅）東、名鳥群飛古畫中。仙吏不知何處隱、山南山北雨濛濛。	古畫	全唐 697
5	卷 44	江行西望	西望長安白日遙、半年無事駐蘭橈。欲將張翰秋江雨、畫作屏風寄鮑昭。	畫作屏風寄鮑昭。	全唐 698

〔前蜀〕張蠙（生没年不詳）卷 45

字は象文。清河（河北省）の人。乾寧二年（895）の進士で、校書郎、樸陽尉、犀浦令を務めた。蜀に乱を避けて拜膳部員外郎となり、金堂令に終わった。『十国春秋』44。『全唐詩』702、885。

1	卷 45	送董卿赴台州	九陌除書出、尋僧問海城。家從中路契、吏隔數州迎。夜蚌侵燈影、春禽雜櫓聲。開圖見異跡、思上石橋行。	開圖見異跡、 思上石橋行。	全唐 702
2	卷 45	贈江都鄭明府	他人豈是稱才術、才術須觀力有餘。兵亂幾年臨劇邑、公清終日似閑居。牀頭怪石神仙畫、篋裏華箋將相書。更欲棲縱近彭沢、香爐峰下結茅廬。	牀頭怪石神仙畫。	全唐 702

〔前蜀〕貫休（832～912）卷 47～55

字は德隱。禪月大師と号した。俗姓は姜氏。婺州蘭溪（浙江省）の人。若くして故郷で出家し、その後、洪州（江西省）、鄱陽（江西省）、蘇州（江蘇省）、廬山（江西省）、杭州（浙江省）、江陵（湖北省）などで修行した。天復三年（903）に蜀（四川省）に行き、前蜀の王建より、禪月大師の称号を賜り、同地で生涯を終えた。詩名が高く、多くの文人と交流をもち、書画にもすぐれた。画は江南の潑墨画家の粗放な表現を学び、奇異な容貌の「十六羅漢圖」で知られる。『十国春秋』47。『宋高僧伝』30。『図画見聞誌』2。『益州名画録』下。『全唐詩』826～837、888。

伝	卷 47	苕溪漁隱叢話、東坡云、唐末五代文章衰陋、詩有貫休、書有重栖、村俗之氣、大率相似。如蘇子美家取藏張長史書云、隔簾歌已後、對面貌弥精。語既凡惡、而字画真重栖之流。近見曾子固編李白詩、有懷素草書歌及笑矣乎數篇、皆貫休以下詞格。	〔書〕 東坡云、唐末五代文章衰陋、詩有貫休、書有重栖、村俗之氣、大率相似。	漁隱叢話前集 5	
伝	卷 47	元温日觀画葡萄跋、拳世只知嗟逝水、何人微解悟空花。此貫休禪師佳句。元温日觀書之、為策勵之端、仍為写龍鬚於後。	〔書画〕 元温日觀画葡萄跋	五代詩話 8	
1	卷 47	古鏡詞	我有一面鏡、新磨似秋月。上唯金膏香、下狀驪龍窟。等閑不欲開、醜者多不悅。或問幾千年、軒轅手中物。	〔鏡鑑〕 古鏡	全唐 827
2	卷 47	上盧少卿覓千文	荆山有美玉、含華尚炳爛。堪為聖君璽、堪為聖君案。草木潤不彫、煙霞覆不散。野人到山下、仰視星辰畔。倘或如栗黃、保之上霄漢。	〔書〕 千（字）文	全唐 827
3	卷 47	謝盧少卿惠千文	廬山有石鏡、高倚無塵垢。昼景分煙蘿、夜魄侵星斗。苞含物象列、搜照魚龍吼。寄謝天地間、毫端皆我有。	〔書〕 千（字）文	全唐 827

4	卷 48	觀懷素草書歌	張顛後顛非顛、直至懷素之顛始是顛。師不譚經不說禪、筋力唯於草書朽、顛狂却恐是神仙。有神助兮人莫及、鉄石画兮墨須入。金尊竹葉數斗餘、半斜半傾山衲濕。醉來把筆擲如虎、粉壁素屏不問主。亂拏亂抹無規矩、羅刹石上坐伍子胥。剗通八字立對漢高祖、勢崩騰兮不可止。天機暗轉鋒鋩裏、閃電光刃霹靂飛、古柏身中淖龍死。駭人心兮目眩膜、頓人足兮神辟易。乍如沙場大戰後、斷槍槊箭皆狼籍。又似深山怪石上、古病松枝掛鉄錫。月兔筆、天竈墨、斜鑿黃金側剗玉。珊瑚枝長大如束、天馬驕擲不可勒。東却西、南又北。倒又起、斷復統。忽如鄂公喝住單雄信、秦王肩上剔著棗木槩。懷素師、懷素師、若不是星辰降瑞、即必是河岳孕靈。固宜須冷笑逸少、爭得不心醉伯英。天台古杉一千尺、巖崩剗折何崢嶸。或細微、仙衣半拆金線垂。或妍媚、桃花半紅公子醉。我恐山為墨兮磨海水、天与筆兮書大地、乃能略展狂僧意。常恨与師不相識、一見此書空歎息。伊昔張涓任華葉季良、數子贈歌詩豈虛飾、所不足者渾未曾道著其神力。石橋被燒却、良玉不土蝕。錐画沙兮印印泥、世人世人爭事測。知師雄名在世間、明月清風有何極。	〔書〕 懷素 草書	全唐 828
5	卷 48	嘗光大師草書歌	雪压千峰橫枕上、窮困雖多還激壯。看師逸蹟兩相宜、高適歌行李白詩。海上驚駭山猛燒、吹斷狂煙著沙草。江樓曾見落星石、幾回試發將軍砲。別有寒鷗掠絕壁、提上元援更生力。又見吳中磨角來、舞槩盤刀初觸擊。好文天子揮宸翰、御製本多堆玉案。晨開水殿教題壁、題罷紫衣親龍錫。僧家愛詩自拘束、僧家愛画亦局促。唯師草聖芸偏高、一掬山泉心便足。	〔書〕 嘗光大師 草書	全唐 837
6	卷 49	觀李翰林真	誰氏子丹青、毫端曲有靈。屹如山忽墮、爽以酒初醒。天馬難攏勒、仙房久閉扃。若非如此輩、何以傲彤庭。(全唐詩にはもう一首あり。日角浮紫氣、凜然塵外清。雖稱李太白、知是那星精。御宴千鍾飲、蕃書一筆成。宜哉杜工部、不錯道騎鯨。)	李(白)翰林真	全唐 829
7	卷 49	懷方干張為	冥搜入仙窟、半夜水堂前。吾道祇如此、古人多亦然。螢沈荒塢霧、月苦綠梧蟬。因憶垂綸者、滄浪何処邊。	方干	全唐 829
8	卷 49	四皓圖	何人圖四皓、如語話嘖嘖。雙鬢雪相似、是誰年最高。溪苔連豹褥、仙酒汗雲袍。想得忘秦日、伊余亦合逃。	四皓圖	全唐 829
9	卷 49	贈方干	盛名与高隱、合近謝敷村。弟子已得桂、先生猶灌園。垂綸侵海介、拾句歷雲根。白日昇天路、如君別有門。	方干	全唐 829
10	卷 49	硯瓦	淺薄雖頑朴、其如近筆端。低心蒙潤久、入匣更身安。応念研磨苦、無為瓦礫看。倘然仁不棄、還可比琅玕。	〔文房具〕 硯瓦	全唐 829
11	卷 49	水壺子	良匠曾陶鑿、多居筆硯中。一從親几案、常恐近兒童。卓立澄心久、提携注意通。不応嫌器小、還有濟人功。	〔文房具〕 水壺子	全唐 829
12	卷 49	筆	莫訝書紳苦、功成在一毫。自從蒙管録、便覺用心勞。手点時難棄、身閑架亦高。何妨成五色、永遠助風騷。	〔文房具〕 筆	全唐 829
13	卷 50	送盧秀才応舉	幾載阻兵荒、一名終不忘。還衝猛風雪、如画冷朝陽(時多画李白、王昌齡、常建、冷朝陽冒風雪入京)。句好慵將出、囊空却不忙。明年公道日、去去必穿楊。	画李白、王昌齡、常建、冷朝陽冒風雪入京。	全唐 831
14	卷 51	寒望九峰作	九朶碧芙蓉、王維圖未圖。層層皆有瀑、一一合吾居。雨歇如争出、霜嚴不例枯。世猶多事在、為爾永躊躇。	王維画	全唐 833
15	卷 52	春晚訪鏡湖方干	幽居湖北濱、相訪值殘春。路遠諸峰雨、時多擱轎人。蒸花初釀酒、漁艇劣容身。莫訝頻來此、伊余亦隱淪。	方干	全唐 834
16	卷 52	上馮使君山水障子	憶山歸未得、画出亦堪憐。崩岸全隳路、荒村半有煙。筆勾岡勢轉、墨搶燒痕顛。遠浦深通海、孤峰冷倚天。柴棚坐逸士、露茗煮紅泉。繡与蓮峰競、威如劍閣牽。石門閑麋鹿、氣候有神仙。茅屋書窗小、苔階滴瀑圓。松根擊石朽、桂葉蝕霜鮮。画出欺王墨、擊將獻惠連。新詩寧妄説、旧隱美如然。願似窗中列、時聞大雅篇。	山水障子 王墨	全唐 831

17	卷 52	送僧入石霜	拳世祇堪呼、空知与道俱。論心齊至聖、对鏡破凡夫。業王如雲合、頭低似箭駝（牛頭大師云、猶妄心起業、業如雲。俱合論云、入地獄、人頭向下也）。三清徒妄想、千載亦須臾。唯我流陽叟、深雲領蠶徒。尽騎香白象、皆握月明珠。寂寞排松榻、爛斑半雪鬚。苔侵長者論、嵐蝕祖師囡。翠巘金鐘曉、香林宝月孤。孰孰齊白趾、赫赫共洪爐。山色鋤難尽、松根蹋欲無。難評伝的的、須到不区区。撩舍新羅瘦、爐煙楷柶粗。燒畚平虎窟、分瀑入香厨。師去情何切、人間事莫拘。穿林宿古冢、蹋葉揭空盂。無事終無事、令枯便合枯。他年相覓在、亦不是生蘇。	祖師囡	全唐 831
18	卷 53	再到鍾陵作	六十年来到豫章、旧遊知己半凋傷。春風還有花千樹、往事都如夢一場。無限邱墟侵郭路、幾多台榭浸湖光。祇應唯有西山色、依旧崔嵬上寺牆。	〔地名〕 鍾陵 豫章	全唐 835
19	卷 54	題某公宅	宅成天下借囡看、始笑平生眼力慳。地占百湾多是水、樓無一面不当山。荷深似入苕溪路、石怪疑行鴈蕩間。只恐中原方鼎沸、天心未遣主人閑。	宅成天下借囡看、始笑平生眼力慳。	全唐 837
20	卷 55	曹娥碑	高碑說爾孝應難、彈指端思白浪間。堪歎行人不迴首、前山应是苧蘿山。	〔書〕 曹娥碑	全唐 837
21	卷 55	贈写經僧楚雲	剔皮刺血誠何苦、為写靈山九会文。十指瀝乾終七軸、後來求法更無君。	〔書〕 写經	全唐 837
補1	未収	上馮使君渡水僧障子	跣足挂巴藤、潺湲渡幾曾。尽權無著印、不是等閑僧。熊耳应初到、牛頭始去登。画来偏觉好、将寄柳吳興。	渡水僧障子	全唐 830
補2	未収	題成都玉局觀孫位画龍（位東越人。僖宗南巡隨入蜀後改名遇）	我見蘇州崑山仙殿中、金城柱上有二龍。老僧相伝道是僧繇手、尋常入海共龍鬪。又聞蜀国王局觀有孫遇蹟、蟠屈身長八十尺。遊人争看不敢近、頭覩寒泉万丈碧。	孫位 画龍 （張）僧繇	全唐 837
補3	未収	觀地獄囡	峨峨非劍閣、有樹不堪攀。仏手遮不得、人心似等閑。周王应未雪、白起作何顏。尽日空彈指、茫茫塵世間。	地獄囡	全唐 837

〔前蜀〕 太后徐氏（?～926） 卷 56

驃騎大將軍・徐耕の女。成都（四川省）の人。王建が即位すると淑妃に冊立され、王衍が即位すると順聖太后（或は翊聖太妃）となった。『十国春秋』38。『全唐詩』9。

1	卷 56	題謁丈人觀先帝聖容	聖帝帰梧野、躬来謁聖顏。旋登三径路、似陟九嶷山。日照堆嵐迫、雲横積翠間。期修封禪礼、方俟再躋攀。	〔彫刻〕 先帝（王建）聖容	全唐 9
2	卷 56	謁丈人觀先帝御容	千尋緑嶂夾流溪、登眺应知海岳低。瀑布迸春青石碎、輪囷横剪翠峰齊。步粘苔蘚龍橋滑、日閉煙蘿鳥径迷。莫道穹天無路到、此山便是碧雲梯。	〔彫刻〕 先帝（王建）御容	全唐 9（篇名は玄都觀）

〔前蜀〕 太妃徐氏（?～926） 卷 56

太后徐氏の妹。王建が即位すると貴妃に冊立され、王衍を生んだ。その即位後、翊聖太妃（或は順聖太后）となった。『十国春秋』38。『全唐詩』9。

1	卷 56	謁丈人觀先帝御容	共謁御容儀、還同在禁闈。笙歌喧宝殿、彩仗耀金徽。清淚沾羅袂、紅霞拭繡衣。九嶷山水遠、無路断湘姬。	〔彫刻〕 先帝（王建）御容	全唐 9
2	卷 56	題謁丈人觀	登尋丹壑到元都、接日紅霞照座隅。即向周迴岳上看、似看曾進画囡無。	〔彫刻〕 似看曾進画囡無。	全唐 9 （篇名は玄都觀）

〔前蜀〕 巖氏（生没年不詳） 卷 56

天雄軍節度使・王承休の妻。

1	卷 56	妝鏡銘詞	鍊形神冶、瑩質良工。当眉写翠、对臉傳紅。如珠出匣、似月停空。綺窗繡幌、俱涵影中。	〔鏡鑑〕 妝鏡銘	未収（十国春秋 46、五代詩話 1）
---	------	------	--	-------------	--------------------

〔前蜀〕 瓦棺銘 卷 56

1	卷 56	瓦棺銘〈学圃蕙蘇、王蜀秦州節度使王承檢、築防番城、至上邽山下、得一瓦棺、有片石刻篆字曰、大隋開皇二年渭州刺史張崇妻夫人王氏年二十五卒銘云云。是歲為乾德六年丙子歲也。合郎即王承檢小字〉	車道之北、邽山之陽。深深葬玉、鬱鬱埋香。刻斯貞石、煥乎遺芳。地變陵谷、險列城隍。乾德丙年、壞者合郎。	〔書〕 瓦棺銘	全唐 875
---	------	---	--	------------	--------

〔後蜀〕 後主孟昶 (919 ~ 65、在位 938 ~ 65) 卷 57

字は保元。原名は仁贇。邢州龍岡 (河北省) の人。後蜀の高祖・孟知祥の第3子。内政に努めたが、広政二十八年 (965) に宋に降り、開封に移ったがまもなく没した。『旧五代史』136。『新五代史』64。『十国春秋』49。『全唐詩』80。

伝	卷 57	十国春秋 (中略)、初、高祖抱有一方、晩年専務奢侈、尚食掌食典至百卷、中有賜緋羊酒骨槽等名。寢室常設画屏七十張、関百紐而合之、号曰幃窗。又有煌明帳、色浅紅、類鮫綃、於縵文中具十洲三島之象、夜則燦爛如金箔、施之大小牀皆称。後主初襲位、頗勤政事、寢处惟紫羅帳、碧綾帷、褥無錦繡諸飾。至於盥漱之具、但用白金、雜以黑漆木器 (後略)。	〔画・染織〕 寢室常設画屏七十張。 又有煌明帳、色浅紅、類鮫綃、於縵文中具十洲三島之象。	十国春秋 49
伝	卷 57	元費著器物譜、広政十四年冬十月十五日、彭山県副将領揚富、獲銅印於江岸。印有六面、方各寸許、皆有篆文。兩面共通一竅、竅中三虚一実。其直可貫、其円可規。六面篆文、共八十。二十分夾其竅、六十均在四旁、各成文章。一面、天国老君生万民治中国外国人和璽凡十五字、其相对一面云、老君授生輔天下国安平受道人長生凡十五字、又一面、虚無自然明日月星辰光凡十字、其相对一面云、元女致和氣玉女致天医凡十字、又一面、上国僊師天帥老君道成明天地政璽凡十五字、其相对一面云、上召拜無為大昊通天下治氣同璽凡十五字。	〔書〕 広政十四年冬十月十五日、彭山県副将領揚富、獲銅印於江岸。印有六面、方各寸許、皆有篆文。	器物譜 (全蜀芸文志 56)

〔後蜀〕 徐光溥 (生没年不詳) 卷 57

蜀 (四川省) の人。後蜀に仕えて、翰林学士、兵部侍郎などを経て、宰相となった。『十国春秋』52。『全唐詩』761。

1	卷 57	題黄居采秋山図〈居采、字伯鸞、筌季子也。工画花竹翎毛。事後主為翰林待詔、与筌同被恩寵、因画殿庭牆壁、宮闈屏障、不可勝紀。広政十五年、後主命往葛仙山、回、至彭州、棲真南軒、絵水石一堵、自未越西而畢。觀者嘆其敏妙。又常奉後主命、与筌同画秋山図、以答江南信幣、学士徐光溥作秋山図歌以美之〉	天与黄筌芸奇絶、筆精迴感重瞳悦。運思潜通造化工、揮毫定得神仙訣。秋來奉詔写秋山、写在輕綃数幅間。高低向背無遺勢、重巒疊嶂何孱顔。目想心存妙尤極、研巧覈能狀不得。珍禽異獸皆自馴、奇花怪木非因植。崎嶇石磴絶遊蹤、薄霧冥冥藏半峰。娑蘿掩映迷仙洞、薜荔纍垂織古松。月檻參 (以下に欠字があり、『益州名画録』卷中、黄居采条によって補う。差錦鱗出、星壇斑駁翠苔封、傍岸牛羸行嚼草、過) 橋僧老坐撐筇。屈原江上嬋娟竹、陶潜籬下芳菲菊。良宵祇恐鷓鴣啼、晴波但見鴛鴦浴。暮煙霽霽鎖村塢、一葉扁舟横野渡。颯颯白蘋欲起風、黯黯紅蕉猶帶雨。曲沼芙蓉香馥郁、長汀蘆荻花蕪菽。雁過孤峰帖遠青、鹿傍小溪飲殘綠。秋山秀兮秋江静、江光山色相輝映。雪迸飛泉濺釣磯、雲分落葉擁樵徑。張璪松石徒称奇、辺鸞花鳥何足窺。白旻鷹逞凌風勢、薛稷鶴誇警露姿。方原画山空巉岩、峭壁枯槎人見嫌。孫位画水多洶湧、驚湍怒濤人見恐。若教对此定妍媸、必自伏膺懷愧恐。再三展向冕旒側、便是移山回礪力。大李小李減声華、猷之愷之無顔色。髣髴垂綸渭水濱、吾皇睹之思良臣。依稀荷鍤傳巖野、吾皇睹之求賢者。徒茲仄展復懸旌、宵衣旰食安天下。才当老人星応候。願与南山俱献寿。微臣稽首貢長歌、丹青景化同天和。	黄居采 秋山図	全唐 761
---	------	---	--	------------	--------

〔後蜀〕 顧夔（生没年不詳） 卷 57

前蜀で給事内庭、茂州刺史を務め、後蜀では太尉に至った。『十国春秋』56。『全唐詩』760、894。

伝	卷 57	十国春秋、前蜀通正時、夔以小臣給事内廷。会秃鷲鳥翔摩訶池上、復作詩刺之、禍幾不測。詩云、昔日曾看瑞応図、百般祥瑞不如無。摩訶池上分明見、子細看来是那鷲。	瑞応図	十国春秋 56 鑑誠録 6
1	卷 57	春曉曲（第四首） 泓水双飛来去燕、曲檻小屏山六扇。春愁凝思結眉心、綠綺懶調紅錦薦。話別情多声欲戰、玉筯痕留紅粉面。鎮長独立到黄昏、却怕良宵頻夢見。	小屏山六扇	全唐 894 (篇名は木蘭花)

〔後蜀〕 蔣詒（貽）恭（生没年不詳） 卷 57

江淮の人。唐末に蜀に行き、後蜀の時に県令に取り立てられた。硬骨漢で風刺を善くした。『全唐詩』760、870。

伝	卷 57	野人閑話、巴蜀三紀以來、芸能之士、書画者衆矣。沙門曇瓊、学李陽冰篆、道士張昭嗣、效柳公權書、工部員外昭嘏、仿韓杼木八分、皆杜光庭門人也。僧曉辯、攻張芝草書。黃少監筌、摹辺鸞花竹。處士滕昌祐、擬梁廣花草。野人張道隱、学張璪松石。相国李昊為著名、李司儀、文才繼閣立本、写真書画當代野人。平生讀老莊書、好図龍之真形、飄飄然雲雨氣、有蜿蜒之勢、撰龍証筆訣三卷。彭州倅鄭昭、請画龍於州西門太山府君祠。其夕三更、風雨大作、蔣詒恭留題詩云云（後略）。	巴蜀三紀以來、芸能之士、書画者衆矣。沙門曇瓊 道士張昭嗣 工部員外昭嘏 僧曉辯 黃少監筌 處士滕昌祐 野人張道隱	詩話総龜 21
1	卷 57	題張道隱太山祠画龍 世人空解競丹青、惟子通元得墨靈。応有鬼神看下筆、豈無風雨助成形。威疑噴浪滄海、勢欲擎雲上杳冥。静閉綠堂深夜後、曉來簾幕似閒醒。	張道隱 画龍	全唐 760

〔後蜀〕 韓琮（生没年不詳） 卷 58

字は成封。晚唐の詩人だが、『全五代詩』は、後蜀時代の人とする。『全唐詩』565。

1	卷 58	興平県野中得落星石移置県齋	的的墮芊芊、蒼茫不記年。幾逢疑虎將、応逐犯牛仙。坻地依蘭畹、題詩問錦箋。何時成五色、却上女媧天。	〔石〕 落星石	全唐 565
---	------	---------------	--	------------	--------

〔後蜀〕 歐陽炯（896～971） 卷 58

益州華陽（四川省）の人。初め前蜀に仕え、それが滅ぶと一時中原に身を寄せた。のち後蜀に仕え、宰相にまで至った。さらに、北宋に仕えて翰林学士、左參騎常侍となった。『宋史』479。『十国春秋』56。『全唐詩』761、896。

1	卷 58	貫休心夢羅漢画歌〈黄休復益州名画録云、貫休能詩、善書画。王氏建国時、居蜀中龍華寺、縱筆画水墨羅漢一十六身并一仏二大士、巨石縈雲、枯松帶蔓諸古貌、与他人画不同。或云夢中所睹、覺後図之、謂之応夢羅漢。蜀主宣入内、歎其筆跡狂逸、供養經月、却令付院中。炯時在翰林首觀之、贈以歌〉	西嶽高僧名貫休、孤情峭拔凌清秋。天教水墨画羅漢、魁岸古容生筆頭。時拈大絹泥高壁、閉目焚香坐禪室。忽然夢裡見真儀、腕下袈裟点神筆。高握節腕当空擲、悉窅毫端任狂逸。逡巡便是兩三軀、不似画工虚費日。怪石安弘嵌復枯、真僧列坐連跏趺。形如瘦鶴精神健、頂似伏犀頭骨粗。倚松根、傍巖縫、曲録腰身長欲動。看經弟子擬聞声、瞌睡山童疑有夢。不知夏臘幾多年、一手搯頤偏袒肩。口開或若共人語、身定復疑初坐禪。案前队象低垂鼻、崖畔戲猿斜展臂。芭蕉花裏刷輕紅、苔蘚文中暈深翠。硬筇杖、矮松牀、雪色眉毛一寸長。繩開梵夾兩三片、線補衲衣千万行。林間乱葉紛紛墮、一印残香断烟火。皮穿木屐不曾拖、箒織蒲团鎮長坐。休公休公逸芸無人加、声誉喧喧遍海涯。五七字句一千首、大小篆書三十家。唐朝歷歷多名士、蕭子雲兼吳道子。若將書画比休公、只恐當時浪生死。休公休公始自江南来入秦、於今到蜀無交親。詩名画手皆奇絶、觀你凡人争是人。瓦棺寺裏維摩詰、舍衛城中辟支仏。若將此画比量看、総在人間為第一。	貫休 心夢羅漢画	全唐 761
---	------	---	--	-------------	--------

2	卷 58	<p>題景煥画応天寺壁天王歌〈僖宗時、会稽処士孫位隨駕至蜀、於応天寺門左壁上画天王一座、筆勢狂縱、三十餘年無有敵者。景煥善書画、与炯為忘形交。一日、同遊茲寺、画右壁天王以對之、炯為歌行一篇以紀。有草書僧夢龜、書之廊壁上、成都人号為応天三絶〉</p>	<p>錦城東北黄金地、故跡何人興此寺。白眉長老重名公、曾識会稽山处士。寺門左壁画天王、威儀部從來何方。鬼神怪異滿壁走、当簷颯颯生秋光。我聞天王分理四天下、水晶宮殿琉璃瓦。綵仗時驅佛袂裝、金鞭頻策騏驎馬。毗沙大像何光輝。手擎巨塔凌雲飛、地神對出宝餅子。天女倒披金縷衣、唐朝說著名公画。周昉毫端善画写、張僧繇是有神人。吳道子称無敵者、奇哉妙手伝孫公。能於此地留神蹤、斜窺小鬼怒双目。直倚越狼高半胸、宝冠動綵生威容。趨踏左右來傾恭、臂橫鷹爪尖纖利。腰纏虎皮斑剥紅、飄飄但恐入雲中。步驟還疑歸海東、蟒蛇拖得渾身墮。精魅搦來双眼空。當時此芸實難有、鎮在宝坊称不朽。東辺画了空西辺、留与後人教敵手。後人見者皆心驚、尽為名公不敢争。誰知未滿三十載、或有異人來問生。匡山处士名称樸、頭骨高奇連五嶽。曾持象簡累為官、又有蛇珠常在握。昔年長老遇奇蹤、今日門師識景公。興來便請泥高壁、乱槍筆頭如疾風。逡巡隊仗何顛逸、散漫奇形皆湧出。交加器械滿虚空、兩面或然如鬪敵。聖王怒色覽東西、劍刃一揮皆整齐。腕頭獅子咬金甲、脚底夜叉擊絡鞮。馬頭壯健多筋節、烏鶻彎環如屈鉄。遍身虺虺亂縱橫、繞額鬪髻乾牙裂。眉粗眼豎髮如錐、怪異令人不可知。科頭巨卒欲生鬼、半面女郎安小兒。况聞此寺初興置、地脉沈沈当正氣。如何請得二山人、下筆咸成千古事。君不見明皇天宝年、画龍致雨非偶然。包含万象藏心裡、變現百般生眼前。後來画品列名賢、唯此二人堪比肩。人間是物皆求得、此様欲於何處伝。嘗憂壁底生雲霧、揭起寺門天上去。</p>	<p>景煥 応天寺壁天王 孫位 周昉 張僧繇 吳道子（道玄）</p> <p>〔書〕 草書 僧夢龜</p>	全唐 761
---	------	--	--	---	--------

〔後蜀〕李堯夫（生没年不詳） 卷 59

梓潼（四川省）の人。『全唐詩』795。

1	卷 59	盆池	<p>円内陶化功、外絶衆流通。選処離松影、穿時減葉叢。別疑天在地、長対月当空。每使登門客、煙波入夢中。</p>	〔盆景〕 盆池	全唐 702（張蠙）
---	------	----	---	------------	------------

〔後蜀〕章穀（生没年不詳） 卷 59

後蜀に仕えて監察御史となった。唐人の詩を集め『才調集』十巻を編纂したことで知られる。『十国春秋』56。

1	卷 59	斑竹簟	<p>龍鱗滿牀波浪湿、血光点点湘娥泣。一片晴霞凍不飛、深沈尽訝蛟人立。百朶排花蜀纈明、珊瑚枕滑葛衣輕。閒窗独卧曉不起、冷浸羈魂錦江裏。</p>	〔工芸〕 斑竹簟	全唐 785（無名氏の作として収録）
2	卷 59	天竺国胡僧水精念珠	<p>天竺胡僧踏雲立、紅精素貫鮫人泣。細影疑隨爛火銷、円光恐滴架梁溼。夜梵西天千仏声、指輪次第驅寒星。若非葉下滴秋露、則是井底円春水。凄清妙麗応難並、眼界真如意珠静。碧蓮花下独提携、堅潔何如幻泡影。</p>	〔工芸〕 水精念珠	全唐 785（無名氏の作として収録）

〔後蜀〕彭暁（生没年不詳） 卷 60

字は秀川。永康（浙江省）の人。後蜀の祠部員外郎、金堂令を務めた。修煉養生の道を志し、真一子と号した。『十国春秋』57。『全唐詩』855。

伝	卷 60	<p>十国春秋、暁常分魏伯陽參同契為九十章而註之、以応火侯九転、餘鼎器歌一篇、以応真鉛得一、且為図八環、謂之明鏡図、今有參同契分章通真義三巻、明鏡図訣一卷行世。</p>	〔工芸〕 鼎器歌 〔鏡鑑〕 明鏡図訣	十国春秋 57	
1	卷 60	參同契明鏡図訣詩	<p>造化潜施跡莫窮、簇成真訣指蒙童。三篇秘列八環内、万象門開一鏡中。離女駕龍為木壻、坎男乘虎作金翁。同人好道宜精究、究得長生路便通。至道希夷妙且深、燒丹先認大還心。日爻陰耦生真汞、月卦陽奇産正金。女妊朱砂男孕雪、北蔵熒惑丙含壬。兩端指的鉛金祖、莫向諸般取次尋。</p>	〔鏡鑑〕 明鏡図訣	全唐 855

〔後蜀〕 可朋（生没年不詳） 卷 60

丹稜人（四川省）の人。詩僧。酒を好み自ら醉髡と号した。『全唐詩』849、888。

1	卷 60	贈方干	盛名伝出自皇州、一挙参差便縮頭。月裏豈無攀桂分、湖中剛愛釣魚休。童偷詩藁呈隣叟、客乞書題謁郡侯。独泛短舟何限景、波濤西接洞庭秋。	方干	全唐 849
---	------	-----	--	----	--------

〔後蜀〕 花蕊夫人徐氏（生没年不詳） 卷 60

青城（四川省）の人。父は徐国璋。孟昶の慧妃。『十国春秋』50。『全唐詩』798。

1	卷 60	宮詞百首	（第十六首）六宮官職総新除、宮女安排入画図。二十四司分六局、御前頻見錯相呼。（末注）〈十国春秋、徐氏婦宋、心未忘蜀、每懸昶像以祀、詭言、宜子之神、張仙挾彈図、即昶也。童子乃太子元喆、武士為趙廷隱〉。	六宮官職総新除、宮女安排入画図。 （孟）昶像 張仙挾彈図	全唐 798
---	------	------	---	------------------------------------	--------

〔後蜀〕 石恪（生没年不詳） 卷 60

字は子専。成都（四川省）の人。後蜀の画家で道釈人物画を善くし、粗放な筆致の逸品画風も手掛けた。蜀が滅ぶと、開封に連行され勅命を受け、相国寺の壁画を制作した。画院に職を与えられたが、辞退して帰郷する途中に没したという。『十国春秋』56。『聖朝名画評』1、3。『図画見聞誌』3。『益州名画録』中。『全唐詩』865。

伝	卷 60	紀事、恪善画、尤長於山水禽魚、亦工歌詩。開宝中、王師下西蜀、遣名画入京、恪在其中、宣於相国寺画壁。工畢上状乞婦。奉勅任便出京、卒於道中。雍熙元年、殿直雷承昊、奉命來衡陽、恪為七言詩送之。迨暮与恪宿於公舍、達曉分携。承昊行經数里、思恪已卒数年、遽出所贈詩、多言衡陽風土人物。及到任、公字一如恪言。	石恪 善画、尤長於山水禽魚。	五代詩話 9
---	------	---	-------------------	--------

〔南漢〕 黄損（生没年不詳） 卷 61

字は益之。連州（広東省）の人。後梁の龍徳二年（922）の進士。南漢の劉龔に仕えて左僕射に至った。『十国春秋』62。『全唐詩』734。

伝	卷 61	百斛明珠、虔州布衣頼仙芝、言連州有黄損僕射、五代時人。僕射蓋仕南漢也。未老退婦、一旦忽遁去、莫知所在。子孫画像事之、凡三十三年乃婦。坐阼階上呼家人、其子不在、孫出見之、索筆書壁上云云。投筆而去、不可留。子婦問其状貌、云甚似影堂中人也。	（黄損）画像	東坡志林 7
---	------	---	--------	--------

〔南漢〕 南漢羅浮古劍篆文 卷 61

1	卷 61	南漢羅浮古劍篆文〈南漢主劉龔時、羅浮山掘得古劍、有篆文云云〉	丁与水同宮、王將耳口同。尹來居口上、山岫獲重重〈解者云、宋太祖以丁亥年降誕、是丁水同宮也。於文、耳口王為聖、尹口為君、重山為出。蓋丁亥年而聖君出也〉。	〔工藝、書〕 古劍篆文	全唐 875
---	------	--------------------------------	---	----------------	--------

〔楚〕 張迥（生没年不詳） 卷 62

唐末の詩人。『全唐詩』727、795。

1	卷 62	寄遠	錦字憑誰達、閑庭草又枯。夜長燈影滅、天遠雁声孤。蟬鬢凋将尽、虬髯黑在無。幾回愁不語、因看朔方図。	朔方図	全唐 727
---	------	----	--	-----	--------

〔楚〕 曹崧（生没年不詳） 卷 62

衡陽（湖南省）の人。『全唐詩』886（曹松として録）。

1	卷 62	寄方干	桐廬江水閑、終日对柴関。因想別離处、不知多少山。釣舟春岸澗、庭樹晚煙還。莫便求棲隱、桂枝堪恨顔。	方干	全唐 673（周朴） 全唐 886
---	------	-----	--	----	----------------------

〔楚〕 裴説 (生没年不詳) 卷 64

桂州 (広西省) の人。裴諧の兄。唐の天祐三年 (906) の進士。官は礼部員外郎。『全唐詩』 720。

1	卷 64	懷素台歌	我呼古人名、鬼神側耳聽。杜甫李白与懷素、文星酒星草書星。永州東郭有奇怪、筆塚墨池遺跡在。筆塚低低高如山、墨池浅浅深如海。我来恨不已、争得青天化為一張紙。高声喚起懷素書、搦管研朱点湘水。欲歸家、重歎嗟、眼前有三箇字、枯樹槎、烏梢蛇、墨老鴉。	〔書〕 懷素	全唐 720
2	卷 64	寄貫休	憶昔与吾師、山中靜論時。総無方是法、難得始為詩。犬吠眠乾葉、飢禽啄病梨。他年白蓮社、猶許重相期。	貫休	全唐 720

〔楚〕 裴諧 (生没年不詳) 卷 64

桂州 (広西省) の人。裴説の弟。天祐三年 (906) の進士。桂嶺撰令に終わった。『十国春秋』 75。『全唐詩』 715。

1	卷 64	觀修処士桃園図歌	一従天寶王維死、於今始見修夫子。能向蛟納四幅中、丹青暗与春争工。勾芒若見応羞殺、暈緑勻紅漸分別。堪憐彩筆似東風、一朵一枝随手発。燕支乍湿如含露、引得嬌鶯癡不去。多少遊蜂尽日飛、看遍花心求入処。工夫妙麗実奇絶、似対韶光好時節。偏宜留著待深冬、鋪向楼前殫霜雪。	修処士 桃園図	全唐 715 (篇名は 觀修処士画桃花 図歌)
---	------	----------	--	------------	-------------------------------

〔楚〕 蕭結 (生没年不詳) 卷 64

廬陵 (江西省) の人。祁陽県令となった。『全唐詩』 873。

伝	卷 64	調元按、楚多詩人、不見全什者、附録於此。(中略) 十国春秋、石文德、連州人。素不善草隸詩律。一日得晋帖数紙、及殷璠詩選、極力摹倣、久之、迺出儔輩、遨遊湘漢、無所知名 (後略)。	〔書〕 石文德、連州人。素不善草隸詩律。一日得晋帖数紙、及殷璠詩選、極力摹倣。	十国春秋 73
---	------	--	--	---------

〔楚〕 張白 (生没年不詳) 卷 65

衡州 (湖南省) の人 (清河〔河北省〕、邢州〔河北省〕の人ともいう)。字は虚白。科挙には及第せず、仙道に入った。『全唐詩』 861。

1	卷 65	哭陸先生	六親慟哭還復蘇、我笑先生淚箇無。脱履定帰天上去、空墳留入武陵図。	武陵図	全唐 861
---	------	------	----------------------------------	-----	--------

〔楚〕 虚中 (生没年不詳) 卷 65

宜春 (江西省) の人。僧。初め玉笥山に住し、その後、湖湘、越中などに遊んだ。貫休、齊己、鄭谷、司空図らと詩の交わりを結んだ。後、楚の馬氏の客となり湘江粟成寺に住した。『十国春秋』 76。『全唐詩』 848。

1	卷 65	贈屏風廡樓蟾上人	巖房高且静、住此幾寒暄。鹿嗅安禪石、猿啼乞食村。朝陽生樹罅、古路透雲根。独我間相覓、淒涼碧洞門。	屏風	全唐 848
2	卷 65	悼方干処士	先生在世日、祇向鏡湖居。明主未巡狩、白頭間釣魚。煙莎一徑小、洲島四隣疎。独有為儒者、時来弔旧廬。	方干	全唐 848

〔楚〕 馬殷浚城石碣篆 卷 65

1	卷 65	馬殷浚城石碣篆 (全唐詩話、唐末、劉建峰定長沙、遣馬殷領衆浚城濠、得石碣、有古篆十八、其文云云。解者以殷乾寧三年、丙辰歲代立、乃龍拳頭也、至乾祐辛亥歲亡、乃猴掉尾也、殷子希範、以己未歲生、又以開運丁未歲薨、乃羊婦穴也、又以子希崇壬申歲生、後為江南所俘、乃猴離次也)	龍拳頭、猴掉尾、羊為兄、猴作弟、羊婦穴、猴離次。	〔書〕 石碣篆	全唐 875
---	------	--	--------------------------	------------	--------

〔吳越〕 忠懿王錢俶 (929～88、在位 948～78) 卷 66

字は文徳。初名は弘俶。吳越王・錢元瓘の第9子で、乾祐元年(948)に第5代国王となった。内政に努めたが、北宋の太平興国三年(978)に国土を献じ、以後は開封に移って淮海国王、許王、鄭王などに封じられた。忠懿と諡された。『旧五代史』133。『新五代史』67。『宋史』480。『十国春秋』81～82。『全唐詩』8、879。

伝	卷 66	後村集、予読絳帖、有錢忠懿王使院律詩一首、練句結字、未在高駢、羅紹威之下。後於墨林方氏、見忠懿与其子遺墨五幅、草聖奇古、簡而不煩、得鍾王意。時、忠懿方自杭朝京師、每書必云、吾極無事。又云、不用憂心、事已如此。識天命之有歸、知王者之無敵、脫屣去之、無一毫失国之恨。異乎事窮勢迫、然後面縛、奉降箋、揮淚对宮娥者矣。初、天僖中、文僖公嘗刊忠懿十八帖与墨林。此帖草法酷似碑。今已足貴、况真蹟乎。	〔書〕 絳帖、有錢忠懿王使院律詩一首 忠懿与其子遺墨五幅	五代詩話 1
伝	卷 66	吳越備史、(雍熙二年〔985〕春正月)帝以王春山幾焙茗旗香之句、令書筆跡、王以風恙、手不能握筆、命將往時所書、絹函草字、遣世子惟濬、同中使以進、下詔獎諭、仍賜金匣玉硯一副等物(後略)。	〔書〕 王(錢俶)以風恙、手不能握筆、命將往時所書、絹函草字。	吳越備史補遺

〔吳越〕 彭城郡王錢惟治 (949～1014) 卷 66

字は和世。第4代吳越王・錢俶の長子。杭州臨安(浙江省)の人。奉国軍節度使などを務め、宋に帰属後は鎮国軍節度使などに任じられた。『宋史』480 吳越錢氏世家。『十国春秋』83。

伝	卷 66	十国春秋、惟治草隸擅絶、尤好三(二カ)王書。毎日、心能御手、手能御筆、則法在中矣。常以鍾繇、王羲之、康元示墨跡凡七軸、裝潢為獻。太宗嘗与翰林賀丕顯評惟治書曰、諸錢皆效浙僧垂棲之蹟、故筆無骨、獨惟治工耳。惟治好學、家聚法帖圖書万餘卷、多異本。生平慕皮、陸為詩、有集十卷。又有宝子垂綬連環詩、迴文詩也。宝子、即香爐、世多稱之。書跡恒為人藏弄。	〔書〕 (錢)惟治草隸擅絶。太宗嘗与翰林賀丕顯評惟治書曰、諸錢皆效浙僧垂棲之蹟、故筆無骨、獨惟治工耳。	十国春秋 83
---	------	---	--	---------

〔吳越〕 錢昆 (生没年不詳) 卷 66

字は裕之。吳越王・錢俶の子。杭州臨安(浙江省)の人。宋に帰属後、進士となり、三司度支判官、秘書監などを務めた。『十国春秋』83。

伝	卷 66	十国春秋、昆善為詩賦、又工草隸、有文集十卷。又工画、常繪寒蘆沙鳥於团扇、人競宝之。性嗜蠅、常求補外職、曰、但得有蠅、無通判処、足慰素願也。	〔書画〕 昆善為詩賦、又工草隸、有文集十卷。又工画、常繪寒蘆沙鳥於团扇、人競宝之。	十国春秋 83
---	------	---	--	---------

〔吳越〕 錢易 (968～1026) 卷 66

字は希白。吳越王・錢俶の子。錢昆の弟。杭州臨安(浙江省)の人。咸平二年(999)の進士で、翰林学士に至った。『宋史』317 錢惟演伝付伝。『十国春秋』83。『全宋詩』104。

伝	卷 66	十国春秋、易年十七舉進士。試崇政殿三篇、日未中而就。言者惡其輕俊罷之。再舉進士、府試第二。自謂当第一、乃上書言朽索之馭六馬賦、意涉譏諷、帝降為第二。易才學敏贍、数千百言、援筆立就。又善尋尺大書行草、喜觀仏書、檢道藏。	〔書〕 (錢易)又善尋尺大書行草。	十国春秋 83
---	------	--	----------------------	---------

〔吳越〕 羅隱 (833～910) 卷 67～72

本名は横。字は昭諫。新城(浙江省)の人。唐朝の科挙には及第せず、錢鏐に仕えて節度判官や給事中を務めた。『旧五代史』24。『十国春秋』84。『全唐詩』655～665、885。

伝	卷 67	十国春秋、武肅王時、西湖日納魚数斤、号使宅魚。会王召隱題磻溪垂釣図、隱借詩寓意云、呂望当年展廟謨、直釣釣国更何如。若教生在西湖上、也是須供使宅魚。遽謁其征。	磻溪垂釣図	十国春秋 84	
伝	卷 67	又茗溪漁隱叢話、余旧見顏持約所画淡墨杏花、題小詩於後、仍題持約二字、意謂必其所作。因閱唐宋類詩、方知是羅隱詩、持約竊之耳。詩云、暖氣潛復次第春、梅花已謝杏花新。半開半落閑園裏、何異榮枯世上人。	顏持約 画淡墨杏花	漁隱叢話後集 18	
1	卷 67	四頂山(見方輿勝覽)	勝景天然別、精神入画図。一山分四頂、三面瞰平湖。過夏僧無熱、凌冬草不枯。遊人來至此、願剃髮和鬚。	精神入画図	全唐 665

2	卷 67	題方干詩	中間李建州、夏汭偶同遊。顧我論佳句、推君最上流。九霄無鶴板、雙鬢老漁舟。世難方如此、何當浣旅愁。	方干	全唐 659
3	卷 69	和禪月大師見贈	高僧惠我七言詩、頓豁塵心展白眉。秀似谷中花媚日、清如潭底月圓時。應觀法界蓮千葉、肯折人間桂一枝。漂蕩秦吳十餘載、因循猶恨識師遲。	禪月大師（貫休）	全唐 657
4	卷 70	感別元帥尚父	玉函瑤檢下台司、記得當時捧領時。半壁龍蛇蟠造化、滿筐山岳動神祇。疲牛舐犢心猶切、陰鶴鳴雛力已衰。稚子不才身抱疾、日窺貞跡淚又垂。〈戊籤云、此隱以子為托也。隱子名塞翁、善画羊〉	羅塞翁（隱の子） 善画羊。	全唐 660
5	卷 70	扇上画牡丹	為愛紅芳滿砌塔、教人扇上画將來。葉随彩筆參差長、花逐輕風次第開。間挂幾曾停蛺蝶、頻搖不怕落莓苔。根生無地如仙桂、疑是姮娥月裏栽。	扇上画牡丹	全唐 663
6	卷 71	送詔光大師〈師以草書 応制〉	禹祠分首戴灣逢、健筆尋知達九重。聖主賜衣憐絕芸、侍臣摘藻許高蹤。寧親久別街西寺、待詔初離海上峰。一種苦心師得了、不須回首笑龍鍾。	〔書〕 詔光大師 草書	全唐 663
7	卷 72	八駿図	穆滿當年物外程、電腰風脚一何輕。如今縱有驂驪在、不得長鞭不肯行。	八駿図	全唐 665

〔吳越〕 殷天祥（生没年不詳） 卷 74

又の名を道筌。七七と自称した。天下を遊行し、人はその年齢を知らなかったという。『続仙伝』下、『全唐詩』861。

1	卷 74	陽春曲〈七七有異術、過潤州、与客飲云、某有一芸侑飲、顧屏上画婦人曰、可歌陽春曲、婦人応声而歌、其音清亮、似從屏中出〉	愁見唱陽春、令人離腸結。郎去未歸家、柳自飄香雪。	屏上画婦人	全唐 861
---	------	--	--------------------------	-------	--------

〔吳越〕 無作（生没年不詳） 卷 74

僧。字は不用。自ら道遥子と号した。俗姓は司馬。姑蘇（江蘇省）の人。四明山など江南を遊歴した。『十国春秋』89。『宋高僧伝』30。『全唐詩』849。

伝	卷 74	（全五代詩本伝）無作、字不用、姓司馬氏、蘇州人。吳越四明山僧、善草隸、詩歌、不調王侯、自号道遥子。	〔書〕 無作（中略）善草隸。	十国春秋 84
---	------	---	-------------------	---------

〔吳越〕 贊寧（919～1001） 卷 74

僧。俗姓は高氏。徳清（浙江省）の人。天台で律を学び、吳越王の帰依を受け、両浙僧統に任じられ、明義の号を賜った。宋の太宗の命を受け『宋高僧伝』を編纂した。『十国春秋』89。

伝	卷 74	十国春秋（中略）、徐知諤得絵牛一軸、昼則嚙草欄外、夜則帰宿欄中、持以献江南後主、後主馳駢貢宋、太宗群臣無能弁其理者、贊寧曰、南倭海水或減、則灘磧微露、倭人拾方諸蚌蠟、中有餘淚、和色著物、則昼隱而夜顯。沃焦山或風橈飄擊、有石落海岸、得之、滴水磨色染物、則昼明而夜晦。此二形殆二物所絵也。群臣以為無稽。贊寧曰、事載張騫海水異物記、公等特未見耳。後杜鎬檢三館書目、果於六朝旧本得之。	徐知諤得絵牛一軸、昼則嚙草欄外、夜則帰宿欄中、持以献江南後主、後主馳駢貢宋。	十国春秋 89
---	------	--	--	---------

〔閩〕 開国伯王延彬（生没年不詳） 卷 75

光州固始（河南省）の人。泉州（福建省）に生まれた。閩の太祖・王審知の弟の審邽の子。平盧節度使、権知泉州軍州事などを務め、開国伯に封じられた。『十国春秋』94。『全唐詩』763。

伝	卷 75	五国故事、延彬日亭午方起、雅能詩、辞人禪客謁見、多為所屈。宅中声妓多北人、将求妓、必凶己形而書其歌詩於凶側、以是冀其見慕也。	宅中声妓多北人、将求妓、必凶己形而書其歌詩於凶側。	五国故事下
---	------	--	---------------------------	-------

〔閩〕 韓偓 (842～914?) 卷75～79

字は致光あるいは致堯。京兆万年(陝西省)人。唐の龍紀元年(889)の進士。翰林学士承旨などを務めたが、唐末には閩の王審知のもとに身を寄せた。『新唐書』183。『十国春秋』95。『全唐詩』680～683、891。

伝	卷75	宣和書譜(中略)、(韓偓)行書亦可喜。題懷素草書詩云、怪石奔秋澗、寒藤挂古松。若教臨水畔、字字恐成龍。非潛心字學、作語不能逮此。	〔書〕 (韓偓)行書 題懷素草書詩	宣和書譜 10	
1	卷75	草書屏風	何処一屏風、分明懷素蹤。雖多塵色染、猶見墨痕濃。怪石奔秋澗、寒藤挂古松。若教臨水畔、字字恐成龍。	〔書〕 草書屏風	全唐 682
2	卷76	失鶴	正憐標格出華亭、況是昂藏入相經。碧落順風初得志、故巢因雨却聞腥。幾時翔集來華表、每日沈吟看画屏。為報雞群虛嫉妬、紅塵向上有青冥。	鶴 每日沈吟看画屏。	全唐 681
3	卷77	安貧(唐音戊織按、史称偓直内禁、屢參密謀、為全忠所忌。又侍宴時、全忠臨陛宣事、衆皆去席、偓守礼不為動、全忠以為薄己。其云、危將虎鬚、非独薦趙崇一事也。撫言、広記所載、似未盡然。)	手風慵展八行書、眼暗休尋九局囚。窗裏日光飛野馬、案頭筠管長蒲蘆。謀身掘為安蛇足、報国危曾捋虎鬚。举世可能無默識、未知誰擬試齊竽。	〔書画〕 八行書 九局囚	全唐 681
4	卷77	冬日	蕭條古木銜斜日、感漉晴寒滯早梅。愁処雪煙連野起、静時風竹過牆來。故人每憶心先見、新酒偷嘗手自開。景狀入詩兼入画、言情不尽憾無才。	景狀入詩兼入画。	全唐 682
5	卷78	同年前虞部李郎中自長沙赴行在余以紫石研贈之賦詩代書	斧柯新樣勝珠環、堪贊星郎染翰時。不向東垣修直疏、即須西掖草妍詞。紫光称近丹青筆、声韻宜裁錦繡詩。蓬島侍臣今放逐、羨君迴去逼龍墀。	〔文房具〕 紫石研	全唐 682
6	卷78	商山道中	雲横峭壁水平鋪、渡口人家日欲晡。却憶往年看粉本、始知名画有工夫。	粉本 名画	全唐 682
7	卷78	宝剑	困極還应有甚通、難將糞壤掩神蹤。斗間紫氣分明後、擘地成川看化龍(有甚通、万首絶句作、有日通。後二句作、但教出得豊城後、不是延津亦化龍)。	〔工芸〕 宝剑	全唐 680
8	卷78	建溪灘波心目驚眩余平生溺奇境今則畏怯不暇因書二十八字(是年至邵武)	長貪山水羨漁樵、自笑揚鞭趨早朝。今日建溪驚恐後、李將軍画也須燒。	李(思訓)將軍画	全唐 681
9	卷79	信筆	睡髻休頻攏、春眉忍更長。整釵梳子重、泛酒菊花香。繡暈昏金色、羅揉損研光。有時間弄筆、亦画兩鴛鴦。	画兩鴛鴦	全唐 683
10	卷79	荷花	鈿扇相欹綠、香囊獨立紅。浸淫因重露、狂暴是秋風。逸調無人唱、秋塘每夜空。何由見周昉、移入画屏中。	周昉	全唐 683
11	卷79	已涼	碧闌干外繡簾垂、猩色屏風画折枝。八尺龍鬚方錦褥、已涼天氣未寒時。	屏風 画折枝	全唐 683

〔閩〕 徐夔(生没年不詳) 卷80～83

名は寅ともいう。字は昭夢。莆田(福建省)の人。乾寧元年(894)、進士に及第し、後に閩に仕え掌書記となった。『十国春秋』95。『全唐詩』708～711。

1	卷80	尚書命題瓦硯	遠向端溪得、皆因郢匠成。鑿山青霽斷、琢石紫花輕。散墨松香起、濡毫藻句清。入台知價重、著匣恐塵生。守黑還全器、臨池早著名。春闈携就處、軍幟載將行。不独雄文陣、兼能助筆耕。莫嫌涓滴潤、深染古今情。洗处無瑕玷、添時識滿盈。蘭亭如見用、敲夏有金声。	〔文房具〕 瓦硯	全唐 711
2	卷80	詠写真	写得衰容似十全、間開僧舍静時懸。瘦於南国從軍日、老却東堂射策年。潭底看身寧有異、鏡中引影更無偏。借將前輩真儀比、未愧金鑿李謫仙。	写真	全唐 709
3	卷81	渤海寶貢高元因(固か)先輩閩中相訪云本国人写得夔斬蛇劍御溝水人生幾何賦皆以金書列為屏障因而有贈	折桂何年下月中、閩山來問我雕蟲。肯銷金翠書屏上、誰把芻蕘過日東。郊子昔時遭孔聖、由余往日諷秦宮。嗟嗟六国金門士、幾個人能振素風。	〔書〕 (渤海)国人写得夔斬蛇劍御溝水人生幾何賦皆以金書列為屏障	全唐 709

4	卷 82	詠錢	多蓄多歲豈足論、有誰還議濟王孫。能於禍處翻為福、解向讐家買得恩。幾怪鄧通難免餓、須知夷甫不曾言。朝爭暮競婦何處、盡入權門与倖門。	〔貨幣〕 錢	全唐 710
5	卷 82	貢餘秘色茶盞	振碧融青瑞色新、陶成先得吾君。巧剡明月染春水、輕旋薄水盛綠雲。古鏡破苔当席上、嫩荷涵露別江濱。中山竹葉香初發、多病那堪中十分。	〔工藝〕 秘色茶盞	全唐 710
6	卷 82	詠筆二首	秦代將軍欲建功、截龍搜兔助英雄。用多誰念毛皆拔、拋却更嫌心不中。史氏只心婦道直、江淹何獨偶靈通。班超握管不成事、投擲翻從万里戎。君子三婦擅一名、秋毫雖細握非輕。軍書羽檄教誰錄、帝命王言待我成。勢健豈饒淝水陣、鋒銛還學歷山耕。毛乾時有何人潤、盡把燒焚恨始平。	〔文房具〕 筆	全唐 710
7	卷 82	尚書新造花箋	濃染紅桃二月花、只看神筆縱龍蛇。淺澄秋水看雲母、碎擊輕苔問粉霞。寫賦好追陳后寵、題詩堪送竇滔家。使君即入金鑾殿、夜直無非草白麻。	〔文房具〕 花箋	全唐 710
8	卷 82	溪上要一隻白簾扇蓋頭垂釣去年就節推侍御請之蒙惠一柄紫花紋者雖則鱗華具在紙薄不及清源所出因就南郡陳常侍請之遂成拙句	難求珍筮過炎天、遠就金貂乞月門。直在引風欹角枕、且因遮日上漁船。但令織取無花簾、不用挑為飲露蟬。莫道如今時較晚、也應留得到明年。	〔工藝〕 白簾扇 紫花紋	全唐 708
9	卷 83	画松	澗底陰森驗筆精、筆間開展覺神清。曾当月照還無影、若許風吹合有声。枝偃只應元鶴識、根深宜与茯苓生。天台道士頻來見、說似株株倚赤城。	画松	全唐 708
10	卷 83	郡侯坐上觀琉璃瓶中 游魚	宝器一泓銀漢水、錦鱗纔動即先知。似涵明月波寧隔、欲上輕水律未移。薄霧罩來分咫尺、碧綉籠處較毫釐。文翁未得沈香餌、擬置金盤召左慈。	〔工藝〕 琉璃瓶	全唐 710
11	卷 83	自詠十韻	只合滄洲釣与耕、忽依螢燭愧功成。未遊宦路叨卑宦、纔到名場得大名。梁苑二年陪衆客、温陵十載佐双旌。錢財尽是侯王惠、骨肉偕承里巷榮。拙賦偏聞鑄印壳、惡詩親見画圖呈。《使宅行寅回文八体、詩圖兩面。庚午秋、使樓赴宴、每一倒翻誦八韻也》。多栽桃李期春色、潤鑿池塘許月明。寒益衿袵饒美寢、出乘車馬免徒行。粗支菽粟防飢歎、薄有杯盤備送迎。僧俗共鄰棲隱樂、妻孥同愛水雲清。如今便死還甘分、莫更嫌他白髮生。	拙賦偏聞鑄印壳、 惡詩親見画圖呈。	全唐 711
12	卷 83	明妃	不用牽心恨画工、帝家無策及辺戎。香魂若得昇明月、夜夜還應照漢宮。	明妃 画工	全唐 711
13	卷 83	追和賈浪仙古鏡	誰開黃帝橋山塚、明月飛光出九泉。狼藉蘚痕磨不尽、黑雲殘点汗秋天。	〔鏡鑑〕 古鏡	全唐 711

〔閩〕 黃滔 (840 ? ~ ?) 卷 84 ~ 85

字は文江。莆田（福建省）の人。乾寧二年（895）の進士で、光化中（898～901）に四門博士に任じられた。詩文に巧みで、王審知の招きを受けて閩に仕え、韓偓、徐夔らと共に同地の文学の興隆をもたらした。『十国春秋』95。『全唐詩』704～706。

1	卷 84	陳侍御新居	幕客開新第、詞人遍有詩。山憐九仙近、石買太湖奇。樹勢想高日、地形誇得時。自然成避俗、休与白雲期。	〔石〕 石買太湖奇。	全唐 704
---	------	-------	--	---------------	--------

2	卷 84	壺公山 (古老相伝、古仙姓陳、名壺公、於此山成道、因而名焉)	八面峰巒秀、孤高可偶然。数人遊頂上、滄海見東辺。不信無靈洞、相伝有古仙。橘如珠 (一作朱) 夏在、池象月垂穿 (山頭有池而円、兼橘樹朱實夏在)。彷彿昔聞楽、岨嶷半插天。山寒徹三伏、松偃出千年。樵牧時迷所、倉箱歲疊川。巖祠風雨管、怪木薜蘿纏。青草方中藥、蒼苔石裏錢。瓊津流乳竇、春色駐芝田。烏兔中時近、龍蛇蟄処臚。嘉名光列土、秀氣産群賢。瀑鑿瑤台路、溪昇釣浦船。鼇頭擎恐沒、地軸压心旋。蠲疾寒甘露、藏珍起瑞煙。画工飛夢寐、詩客寄林泉。掘地多雲母、綠霜欠木棉。井通鱖吐脉、僧隔虎棲禪 (山間有井通海、盈縮之候。貞元中、有僧号法通、咸通中、有僧号宏播、於其絶頂独禪。昏行至降虎、而法通曾下山遇兩虎争一牛、乃叱而隔之、分令各啖之)。危磴千尋拔、奇花四季鮮。鶴歸懸圃少、鳳下碧梧偏。桃易炎涼熟、茶推醉醒煎。邨家蒙棗栗、俗骨爽猿蟬。谷語昇喬鳥、陂開共帶蓮。落楓丹葉舞、新蕨紫芽拳。翠竹雕羌笛、懸藤煮蜀箋。白雲長掩映、流水別潺湲。作賦前儒闕、冲虚南国先。省郎求牧看、野老葺齋眠 (潘郎中存実詩云、双旌牧清源、吟看壺公翠。又歐陽柎先輩、自刺史蘇君書求泉山之為画屏云、壺公之高、洛陽之深、夢想所思)。寺立興衰創、碑須一二鐫。清吟思却隱、簪紱奈縈牽。	又歐陽柎先輩、自刺史蘇君書求泉山之為画屏云、壺公之高、洛陽之深、夢想所思。	全唐 706
3	卷 85	送二友遊湘中	千里楚江新雨晴、同征肯恨迹如萍。孤舟泊処聯詩句、八月中旬宿洞庭。為客早悲煙草綠、移家晚失嶽峰青。今來無計相從去、歸日汀洲乞画屏。	歸日汀洲乞画屏。	全唐 705
4	卷 85	東林寺貫休上人篆隸題詩	師名自越徹秦中、秦越難尋師所從。墨迹兩般詩一首、香鑪峰下似相逢。	〔書画〕 貫休篆隸	全唐 706

〔閩〕 崔道融 (? ~ 907 ?) 卷 86

荊州 (湖北省) の人。昭宗の時、永嘉県令となり、唐末の乱を閩に避けた。『新唐書』72 宰相世系表 2。『十国春秋』95。『全唐詩』714。

1	卷 86	梅花	数萼初含雪、孤標画本難。香中別有韻、清極不知寒。横笛和愁聽、斜枝倚病看。朔風如解意、容易莫催殘。	〔梅〕 孤標画本難。	全唐 714
2	卷 86	謝朱常侍寄貺蜀茶剡紙二首	瑟瑟香塵瑟瑟泉、驚風驟雨起爐煙。一甌解却山中醉、便覺身輕欲上天。百幅輕明雪未融、薛家凡紙漫深紅。不応点染間言語、留紀將軍蓋世功。	〔文房具〕 剡紙	全唐 714

〔閩〕 林寬 (生没年不詳) 卷 86

侯官 (福建省) の人。『全唐詩』606。

1	卷 86	和周繇校書先輩省中寓直	古木重門掩、幽深祇欠溪。此中真吏隱、何必更巖棲。名姓鐫幢記、經書逐庫題。字随飛蠹欠、塔与落星齊。伴直僧談靜、侵霜蛩韻低。粘塵賀草沒、剝粉薛禽迷 (賀知章草書薛稷鶴也)。衰蘚墻千堵、微陽菊半畦。鼓殘鴉去北、漏在月沈西。每憶終南雪、幾登雲閣梯。時因搜句次、那惜一招携。	〔書画〕 賀知章草書薛稷鶴也。	全唐 606
---	------	-------------	--	--------------------	--------

〔閩〕 劉乙 (生没年不詳) 卷 87

字は子真。泉州 (福建省) の人。閩に仕えて中書舍人となるも、官を棄てて安溪鳳髻山に隠居した。『新五代史』68 王審知伝付伝。『十国春秋』97、『全唐詩』763、886。

1	卷 87	題建造寺	曾看画図勞健美、如今親見画猶籠。減除天半石初泐、欠卻幾株松未枯。題像閩人漁浦叟、集生台鳥謝城烏。我来一聽支公論、自是吾身幻得吾。	曾看画図勞健美、如今親見画猶籠。	全唐 763
---	------	------	--	------------------	--------

〔閩〕 胡令能（生没年不詳） 卷 87

莆田（福建省）の隠者。貞元（785～805）～元和（806～20）年間の人ともいう。『全唐詩』727。

1	卷 87	觀鄭州崔郎中諸妓繡樣	日暮堂前花蕊嬌、爭拈小筆上牀描。繡成安向春園裏、引得黃鸝下柳條。	〔工藝〕 繡樣	全唐 727
---	------	------------	----------------------------------	------------	--------

〔閩〕 虢章（生没年不詳） 卷 87

僧。本姓は黃。莆田（福建省）の人。『全唐詩』823。

1	卷 87	辭南平王召	摧殘枯木倚寒林、幾度逢春不變心。樵客見之猶不採、郢人何事苦搜尋。	〔枯木、寒林〕	全唐 823
---	------	-------	----------------------------------	---------	--------

〔閩〕 閩后陳氏（?～935） 卷 87

小字は金鳳。福清（福建省）の人。唐の福建觀察使陳巖の女。王審知の才人に選ばれ、恵帝・王延鈞の妃となり、龍啓元年（933）に皇后となった。『十国春秋』94。『全唐詩』899。

伝	卷 87	十国春秋（中略）、恵宗晩年得風疾、后遂与幸臣婦守明私。百工院使李可殷少与守明狎、因守明以通於后、出入殿内。恵宗常命錦工造鍍金五綵九龍帳于長春宮。織八龍帳外、以己為一龍。既成、進之、守明日宿於内。国人歌曰、誰謂九龍帳、惟貯一婦郎。李倣作乱、后与匡勝、守明俱見殺。	〔工藝〕 恵宗常命錦工造鍍金五綵九龍帳于長春宮。	十国春秋 94
---	------	--	-----------------------------	---------

〔荊南〕 尚顔（生没年不詳） 卷 88

僧。俗姓は薛。字は茂聖。荊州（湖北省）に居り、廬山、峽州、潭州等にも住んだ。『全唐詩』848。

1	卷 88	懷陸龜蒙処士	布褐東南隱、相伝繼謝敷。高譚夫子道、静看海山図。事免傷心否、棋逢敵手無。関中花数内、独不見菖蒲。	海山図	全唐 848
2	卷 88	寄方干処士	格外綴清詩、詩名独得知。間居公道日、醉卧牡丹時。海鳥和禱望、山僧帶雪期。仍聞称処士、聖主肯相違。	方干	全唐 848
3	卷 88	自紀	諸機忘尽未忘詩、似向詩中有所依。遠境等閑支杖屨、空山容易杖藜歸。清猿一居林叫、白鳥双双避釣飛。欲画浄名居士像、楚香願見陸探微。	浄名居士像 陸探微	全唐 848

〔荊南〕 齊己（864～943?） 卷 89～99

僧。本姓は胡。名は得生。長沙（湖南省）の人。長沙、廬山、江陵、荊州などを巡り、貫休、虚中、曹松、李洞、方干、沈彬、孫光憲等と交流した。書も善くした。『宋高僧伝』30。『宣和書譜』11。『全唐詩』838～847、888。

伝	卷 89	五代史補、同慶寺、僧多而地広、佃戸僅千餘家。齊己則佃戸胡氏之子也。七歳与諸童子為寺司牧牛。然天性穎悟、於風雅之道、日有所得、往往以竹枝画牛、背為篇什。衆僧奇之、且欲壯其山門、遂勸令出家。時、鄭谷在袁州、齊己因携所為詩往謁焉。有早梅詩曰、前村深雪裏、昨夜数枝開。谷笑謂曰、数枝非早、不若一枝則佳。齊己瞿然、不覺兼三衣叩地膜拜、自是士林以谷為齊己一字之師（後略）。	齊己則佃戸胡氏之子也。七歳与諸童子為寺司牧牛。然天性穎悟、於風雅之道、日有所得、往往以竹枝画牛、背為篇什。	五代史補 3	
1	卷 89	古劍歌	古人手中鑄神物、百鍊百淬始提出。今人不要強磨磨、蓮鏢星文未曾沒。一彈一撫聞錚錚、老龍影奪秋燈明。何時得遇英雄主、用爾平治天下去。	〔工藝〕 古劍	全唐 847
2	卷 89	觀李瓊処士画海濤	巨鼇輒側長鯨翻、狂濤顛浪高漫漫。李瓊奪得造化本、都盧縮在秋毫端。一揮一画皆筋骨、滉漾崩騰大鯨臬。葉撲仙槎擺欲沈、下頭心是驅龍窟。昔年曾要涉蓬瀛、唯聞撼動珊瑚声。今来正歎陸沈久、見君此画思前程。千尋万派功難測、海門山小濤頭白。令人錯認錢塘城、羅刹石底奔雷霆。	李瓊処士 画海濤	全唐 847
3	卷 89	靈松歌	靈松靈松、是何根株。盤擗枝幹、与群木殊。世眼爭知蒼翠容、薜蘿遮体深朦朧。先秋瑟瑟生谷風、青陰倒卓寒潭中。八月天威行肅殺、万木凋零向霜雪。唯有此松高下枝、一枝枝在無摧折。癡凍頑冰如鉄堅、重重鎖到槎牙顛。老鱗枯節相把捉、踉蹌立在青崖前。有時深洞興雷電、飛電繞身光閃爍。乍似蒼龍驚起時、攫霧穿雲欲騰躍。夜深山月照高枝、疎影細落莓苔磯。千年朽枿魍魎出、一株寒韻鏘琉璃。安得良工妙罔獲、写將偃蹇懸煙閣。飛瀑声中戰歲寒、紅霞影裏擎蕭索。	〔松〕 靈松 良工	全唐 847

4	卷 90	荊州新秋病起雜題十五首	(第三首) 病起見凶画、雲門興似饒。衲衣櫻笠重、高岳華山遙。命在齋猶赴、刀間髮尺凋。秋光漸輕健、欲去倚江橋。	病起見凶画。高岳華山遙。	全唐 842
5	卷 90	寄鏡湖方干处士	賀監旧山川、空來近百年。聞君与琴鶴、終日在漁船。鳥露深秋石、湖澄半夜天。雲門幾迴去、題偏好林泉。	方干	全唐 838
6	卷 91	寄顧处士	半年離別夢、來往即湖邊。兩幅閑山雪、尋常在眼前。項容藏古翠、張藻卷雲煙。藍淀凶花鳥、時人不惜錢。	顧处士 項容、張藻、藍淀	全唐 842
7	卷 92	宿簡寂觀	万壑雲霞影、千年松檜聲。如何教下士、容易信長生。月共虛無白、香和沈瀟清。問尋古廊画、記得列仙名。	古廊画 列仙	全唐 843
8	卷 93	南歸舟中二首	南歸乘客襪、道路免崎嶇。江上經時節、船中聽鷓鴣。春容含衆岫、雨氣泛平蕪。落日停舟望、王維未有凶。長江春氣寒、客况權聲閑。夜泊諸村雨、程迴數郡山。桑根垂断岸、浪沫聚空灣。已去鄰園近、隨緣是暫還。	王維	全唐 838
9	卷 93	謝興公上人寄山水簇子	半幅古潺湲、看來心意間。何須尋鳥道、即此出人間。巖暮疑啼猿、松深認掩關。知君遠相惠、免我憶歸山。	山水簇子	全唐 838
10	卷 93	聞貫休下世	吾師詩匠者、真箇碧雲流。争得梁太子、重為文選樓。錦江新塚樹、婺女旧山秋。欲去焚香礼、啼猿峽阻修。	貫休	全唐 839
11	卷 93	寄上荊渚因夢廬嶽乃凶壁賦詩	夢繞嵯峨裏、神疏骨亦寒。覺來誰共說、壁上自凶看。古翠松藏寺、春紅杏濕壇。歸心幾時遂、日向漸衰殘。	廬嶽乃凶壁	全唐 839
12	卷 94	謝人墨	珍重歲寒煙、携來路幾千。只應真典誥、消得苦磨研。正色浮端硯、精光動蜀箋。因君強濡染、捨此即忘筌。	〔文房具〕 墨	全唐 840
13	卷 94	寄貫休	子美曾吟处、吾師復去吟。是何多勝地、銷得二公心。錦水流春闊、峨眉疊雪深。時逢蜀僧說、或道近遊黔。	貫休	全唐 841
14	卷 95	謝主人石筍	西園罷宴遊、東閣念林丘。特減花辺峭、來添竹裏幽。憶過陽朔見、曾記太湖求。從此頻吟遠、歸山意亦休。	〔石〕 石筍	全唐 841
15	卷 95	謝重緣旧山水障子	敢望重緣飾、微茫洞壑春。坐看終未是、歸卧始成真。已覺中心朽、猶憐四面新。不因公子鑑、零落幾成塵。	山水障子	全唐 841
16	卷 95	赴鄭谷郎中招遊龍興觀誦題詩板謁七真儀像因有十八韻	何處陪遊勝、龍興古觀時。詩懸大雅作、殿礼七真儀。遠繼周南美、弥旌拱北思。雄方垂朴略、後輩仰箴規。對坐茵花暖、偕行薜陣隳。僧条初學結、朝服久慵披。到处琴棋傍、登樓筆硯隨。論禪忘視聽、譚老極希夷。照日江光遠、遮軒檜影欹。觸鞋松子響、窺立鶴雛癡。始貴茶巡爽、終憐酒散遲。放懷還把握、憩石或撐頤。眺遠凝清眄、吟高動白髭。風鷗心不小、高雀志徒卑。顧我專無作、於身忘有為。叨因五字解、每忝重言期。捨此應休也、何人更賞之。淹留仙境晚、迴騎雪風吹。	七真儀像	全唐 843
17	卷 95	假山〈并序〉	假山者、蓋懷匡廬有作也。往歲嘗居東郭。因夢覺、遂凶于壁。迄于十秋、而攢青疊碧於寤寐間、宛若捫蘿挽樹而昇彼絕頂。令所作做像一面、故不尽万壑千崖神仙鬼怪之宅、聊得解懷。既而功就、乃激幽抱、而作是詩、終於一百八十言爾。 匡廬久別離、積翠杳天涯。静室曾凶峭、幽亭復創奇。典衣酬土餽、擇日運工時。信乎成重疊、隨心作蔽虧。根盤驚院窄、頂聳訝簷卑。鎮地那言重、当軒未厭危。巨靈何忍擘、秦政肯輕移。晚覺莎煙觸、寒聞竹籟吹。藍灰澄古色、泥水合凝滋。引看僧來數、牽吟客散遲。九華渾彷彿、五老頗參差。蛛網藤蘿挂、春霖瀑布垂。加添双石筍、映帶小蓮池。旧說雷居士、曾聞遠大師。紅霞中結社、白壁上題詩。顧此誠徒爾、勞心是妄為。經營慚培塿、賞玩愧童兒。会入千峯去、閒蹤任屬誰。	〔假山〕	全唐 843
18	卷 96	荊州貫休大師旧房	疎篁抽筍柳垂陰、旧是休公種境吟。入貢文儒來請益、出官卿相駐過尋。右軍書画神伝髓、康樂文章夢授心。銷得青城千嶂下、白蓮標塔帝恩深。	貫休	全唐 844
19	卷 96	題画鷺鷥兼簡孫郎中	曾向滄江看不真、卻因凶画見精神。何妨金粉資高格、不用丹青点此身。蒲葉岸長堪映帶、荻花叢晚好相親。思量画得勝籠得、野性由来不恋人。	画鷺鷥	全唐 844
20	卷 96	寄顧蟾处士〈好於山水〉	久聞為客過蒼梧、休說携家歸鏡湖。山水顛狂應尽在、鬚毛凋落免貧無。和僧搶入雲中峭、帶鶴驅成澗底孤。春醉醒來有餘興、因人乞与武陵凶。	顧蟾处士 武陵凶	全唐 844

21	卷 96	謝人惠十色花箋并棋子	陵州棋子浣花箋、深愧携来自錦川。海蚌琢成星落落、吳綾隱出雁翩翩。留防桂苑題詩客、惜寄桃源敵手仙。捧受不堪思出處、七千餘里劍門前。	〔文房具〕 花箋	全唐 844
22	卷 97	題鄭郎中谷仰山居	簷壁層層映水天、半乘岡壠半民田。王維愛甚難拋画、支遁憐多不惜錢。巨石尽含金玉氣、乱峰深鎖棟梁煙。秦争漢奪虚勞力、卻是巢由得穩眠。	王維	全唐 844 (全唐 845にもあり)
23	卷 98	謝人惠端溪硯	端人鑿斷碧溪濤、善備争教惜万金。磬琢已曾經妙手、研磨終見透堅心。安排得主難移動、含貯隨時任淺深。保重更求裝錫匣、問將濡染寄知音。	〔文房具〕 端溪硯	全唐 845
24	卷 98	荆門寄題禪月大師影堂	沢国聞師泥日後、蜀王全礼葬餘灰。白蓮塔向清泉鎖、禪月堂臨錦水開。西岳千篇伝古律(大師著西嶽集三十卷、盛伝于世)、南宗一句印靈台。不堪隻履還西去、葱嶺如今無使迴。	禪月大師(貫休)	全唐 845
25	卷 98	松化為石(近聞金翠山古松化為石)	盤根幾聳翠崖前、却偃凌雲化至堅。乍結精華齊永劫、不随凋變已千年。逢賢必用鐫辭立、肯似荆山鑿餘者。蘇封頑滯卧嵐煙。	〔松・石〕 松化為石	全唐 845
26	卷 98	懷武陵因寄幕中韓先輩何從事	武陵嘉致跡多幽、每見因經恨白頭。溪浪碧通何處去、桃花紅過郡前流。常聞相慕鸞鴻興、鑿井耕田人在否。如今天子正徵搜。	武陵 每見因經	全唐 846
27	卷 99	謝人自鍾陵寄紙筆	故人猶憶苦吟勞、所惠何殊金錯刀。霜雪剪裁新刻硯、鋒鋟管束本宣毫。知君倒篋情何厚、詞客分張看欲徼。不堪來處隔秋濤。	〔書、文房具〕 紙筆	全唐 846
28	卷 99	謝人惠十才子圖	丹青妙写十才人、玉峭冰稜姑射神。醉舞離披真鸞鷲、狂吟崩倒瑞麒麟。飄騰造化山曾竭、採掇珠璣海幾貧。猶得知音与凶画、草堂閑挂似相親。	十才子圖	全唐 844
29	卷 99	看金陵圖	六朝凶画戰爭多、最是陳宮計數訛。若愛蒼生似歌舞、隋皇自合恥干戈。	金陵圖	全唐 846
30	卷 99	送楚雲上人往南嶽刺血写法華經	剥皮刺血誠何苦、欲写靈山九会文。十指瀝乾終七軸、後來求法更無君。	〔仏教美術〕 刺血写法華經	全唐 846
31	卷 99	送胎髮筆寄仁公	内唯胎髮外秋毫、緑玉新裁管束牢。老病手疼無那爾、卻資年少写風騷。	〔文房具〕 胎髮筆	全唐 846
32	卷 99	謝四川曇域大師玉筋篆書	玉筋真文久不興、李斯伝到李陽氷。正悲千載無來者、果見僧中有箇僧。	〔書〕 曇域大師 玉筋篆書	全唐 846(篇名の域は城に作る)
33	卷 99	謝人惠紙	烘焙幾工成曉雪、輕明百幅昼春氷。何消才子題詩外、分与能書貝葉僧。	〔文房具〕紙	全唐 846
補1	未収	謝徽上人見惠二龍障子以短歌酬之	我見蘇州崑山金城中、金城柱上有二龍。老僧相伝道是僧繇手、尋常入海共龍鬪。又聞蜀国玉局觀有孫遇跡、盤屈身長八十尺。遊人争看不敢近、頭覩寒泉万丈碧。近有五羊徽上人、閑工小筆得意新。画龍不誇頭角及鬚鱗、只求筋骨与精神。徽上人、真芸者、惠我双龍不言価、等閑不敢將懸挂、恐是葉公好假龍、及見真龍却驚怕。	二龍障子(張)僧繇孫遇 近有五羊徽上人、閑工小筆得意新。	全唐 847

〔北漢〕 李憚 (916 ~ 88) 卷 100

字は孟深。汴州陽武(河南省)の人。乾祐(948 ~ 50)初の進士。北漢に仕えて翰林学士などを歴任し、宰相となった。宋に降って後、司農卿などを務めた。『十国春秋』108。

1	卷 100	天龍寺千仏樓碑銘	覺皇遞興、大教垂世。成位有期、壞空相繼。大哉賢劫、千仏重光。六度万行、軌躅相望。浩劫迢遙、一念可拱。勿謂難逢、声塵相接。惟彼陶唐、宿列參墟。莓莓沃野、煌煌帝居。天啓亨会、神輪瑞囿。英武我后、后来其蘇。一人有作、撫寧邦域。治民事天、允釐庶績。金像玉樓、伊帝之力。懿哉坤維、永奠皇極。	〔仏教美術〕 天龍寺千仏樓碑銘	未収 (十国春秋 108)
---	-------	----------	--	--------------------	------------------

〔北漢〕 譚用之(生没年不詳) 卷 100

字は藏用。五代末の人。『全唐詩』764。

1	卷 100	古劍	鑄時天匠待英豪、紫焰寒星匣倍牢。三尺何年抃塵土、四溟今日絕波濤。雄心垓下収蛇陣、滯想溪頭伴豹韜。惜是真龍懶拋擲、夜來衝斗氣何高。	〔工芸〕 古劍	全唐 764
---	-------	----	--	------------	--------

〔北漢〕 荆浩（生没年不詳） 卷 100

字は浩然。河内沁水（山西省）の人（河南沁水の人ともいう）。乱世を避けて太行山脈の洪谷に隠棲し、洪谷子と号した。山水を善くし、その著とされる『筆法記』が伝わる。『五代名画補遺』。『図画見聞誌』2。『宣和画譜』10。『全唐詩』727。

1	卷 100	画山水図答大愚	恣意縦横掃、峰巒次第成。筆尖寒樹瘦、墨澹野雲輕。巖石噴泉窄、山根到水平。禪房時一展、兼称苦空情。	画山水図	全唐 727
---	-------	---------	--	------	--------

〔北漢〕 大愚（生没年不詳） 卷 100

鄴都（河北省）青蓮寺の僧。荆浩に画を求めた。『五代名画補遺』。『全唐詩』825。

1	卷 100	乞荆浩画	六幅固牢健、知君恣筆蹤。不求千澗水、止要兩株松。樹下留盤石、天辺縦遠峯。近巖幽湿処、惟藉墨煙濃。	荆浩 兩株松	全唐 825
---	-------	------	--	-----------	--------

考察 五代詩からみた当時の絵画状況

「表『全五代詩』にみえる絵画関連資料」に挙げた詩の中から、本作業の主眼である絵画に関する詩を概観し、それらを通じて五代の絵画状況を考察する¹²。

1 華北の五王朝

(1) 梁 (巻1～8)

五代最初の王朝・梁(907～23)は、唐末の黄巢の乱平定後に汴州(河南省)を本拠地に勢力を拡大した宣武軍節度使の朱全忠(太祖、在位907～12)が、907年に唐最後の皇帝・哀帝(在位904～07)から禪譲を受けて帝位に即いたのに始まる。

唐末に朱全忠に仕えて翰林学士を務めた杜荀鶴(846～904)に、2首の題画詩がある。「八駿図」(梁3～8)¹³は、古代の周・穆王の駿馬八頭を描いた古画で、唐・裴孝源『貞観公私画史』、唐・張彦遠『歴代名画記』、唐・朱景玄『唐朝名画録』、北宋・郭若虚『図画見聞誌』、北宋『宣和画譜』などの画史類に晋唐の作品が著録¹⁴され、しばしば詩文¹⁵にも取り上げられてきた。後述の羅隱(833～910)も「八駿図」(呉越5～7)を詠んでおり、五代においても注目された画題であることをうかがわせる。また、「題花木障」(梁3～9)では、「東風次第に吹くに仮(よ)らず、筆春色を一枝々に勻(あまね)くす」と、春の花木を詠っている。五代の花鳥図作例としては、義武軍節度使・王处直(863～923)の墓(924年、河北省曲陽)から「花鳥図屏風様壁画」(図5)が発見¹⁶されており、唐風の左右対称性の強い装飾的な花鳥図の障屏画が華北地方においても普及していたことが判明している。

このほか、宰相の于兢(生没年不詳)が牡丹を描いた

ことが伝記中に見え(梁1～伝)、張図と跋異、李羅漢の仏画競作の逸話(梁13～1)も収録されており、唐末五代初期の華北における花鳥画、人物画の動向を垣間見せる。

(2) 唐 (巻9～10)

唐(923～36)は、梁と競合関係にあり、太原(山西省)を本拠地に勢力を誇った河東軍節度使・李克用の息子の李存勗(莊宗、在位923～26)が、朱全忠死後の内紛に乗じて唐朝の復活を掲げ、梁を滅ぼしたことに始まる。925年には前蜀を滅ぼすなど五代政権のなかで最大の版図を得たが、李克用の仮子(養子)となっていた李嗣源が謀反して勝利した(明宗、在位926～33)。しかし、後を継いだ実子(閔帝、在位933～34)は、李嗣源の仮子の李從珂(末帝、在位934～36)に殺され、帝位を奪われるというように政権は不安定であった。

李克用に仕えて河東節度副使となった盧汝弼(?～921)、閩州・壁州刺史を務めた唐彦謙(?～893?)が書画を善くしたと伝記に記され(唐1～伝、唐4～伝)、唐へ亡命した契丹(遼、916～1125)宗室の李贊華(899～936)も騎馬人物を得意としたことで知られる(唐5～伝)が、題画詩は収録されていない。

(3) 晋 (巻11～12)

唐の明宗・李嗣源の娘婿の石敬瑭(高祖、在位936～42)は、李從珂が帝位に即くとそれに対抗して太原で挙兵した。北方の契丹から燕雲十六州の割譲を条件に援助を受けて勝利し、契丹皇帝から任命されるかたちで晋(936～46)を建てた。しかし、2代目の石重貴(少帝、在位942～46)は、契丹に対抗したため、逆に攻められて北方に拉致され王朝も滅亡することとなる。

宰相を務めた和凝(898～955)に「題鷹獵兔画」(晋

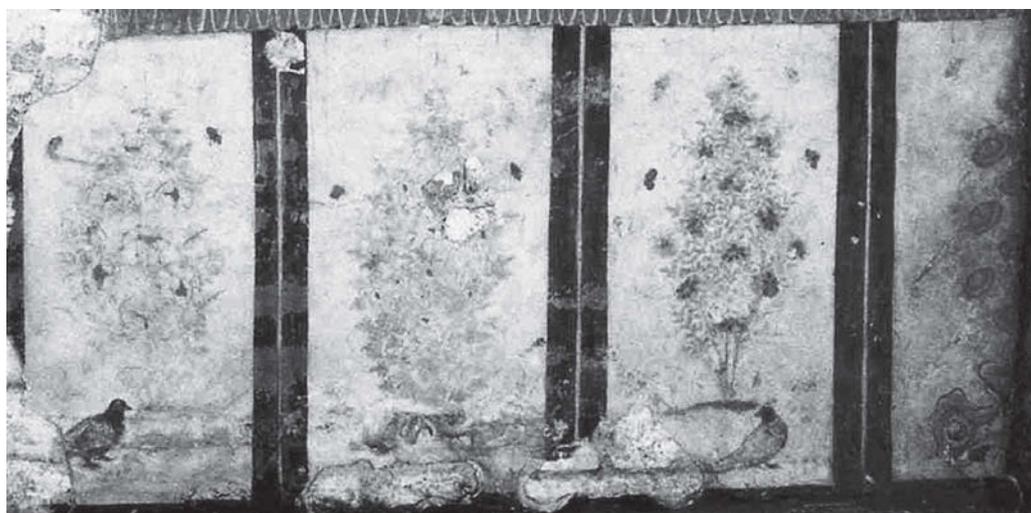


図5 王处直墓 前室西壁「花鳥図屏風様壁画」部分(河北省曲陽県出土)

1-1)がある。鷹は唐代には既に画題として成立しており¹⁷、正倉院南倉にも鷹が鴨を捉えようとする情景を描いた「鷺鳥水禽図(紫檀槽琵琶捍撥)」(図6)が現存している。詩では「君は鷹の眼の疾きを誇るも、我は兎の心の忙(あわただ)しきを憫れむ」と鷹の勇壮さよりも獲物である兎の方に同情を寄せている。五代に画鷹、鷺鳥図を善くした画家に北海宮丘(山東省青州)出身の將軍・郭乾暉がおり、画名を慕って汾陽(山西省)の彼のもとを訪れ弟子入りした天台(浙江省)の鍾隱も知られている¹⁸。戦の続く世相の中で本画題が好まれたことも、詩の背景となっていよう。

和凝には、「華夷図」に言及した「洋川」(晋1-3)もある。唐の宰相で地理に明かった賈耽(730~805)が、貞元十七年(801)に制作し徳宗(在位779~805)へ献上した中国とその周辺の地図で、上表文によれば「海内華夷図一軸、広三丈(約9メートル)、従三丈三尺、率以一寸折成百里。別章甫左衽、奠高山大川、縮四極於織縞、分百郡於作絵。宇宙雖広、舒之不盈庭、舟車所通、覽之咸在目」という大規模なものであった¹⁹。宋代に縮小模刻された碑が現存しており概要を知ることができる(図7)²⁰。和凝詩は図上に漢江流域の洋川(陝西省)を見つけ、「知る青山緑水の辺に在るを」「江近く応に須らく釣船を買うべし」と思いを馳せている。同図は、曹松「観華夷図」(呉3-4)、伍喬「観華夷図」(南唐8-1)にも取り上げられており、分裂期である五代において詩人たちの世界観に大きな刺激を与えたものと思われる。

(4) 漢(巻13~14)・北漢(巻100)

晋を滅ぼした契丹皇帝の耶律徳光(太宗、在位925~47)は、華北をそのまま占領するつもりで、国号も遼と改めたが、結局撤退した。一方、石敬瑭の部下であった劉知遠は、後晋の滅亡を受けて即位(高祖、在位947~48)し、漢(947~50)を建てたが1年で没した。後を継いだ劉承祐(隱帝、在位948~50)は、有力武将たちの力を抑えようとして逆に反乱をまねき、後漢はわずか4年で滅亡する。これは、中国史上最短命の王朝であり、題画詩にも特筆すべき点は見受けられない。

ただ、劉知遠の弟の劉崇(世祖、在位951~54)は、晋陽(山西省)で自立し北漢(十国の一つ、951~79)を建てる。『全五代詩』では、五代北宋の華北山水画の基礎を築いた荆浩と、その画を求めた鄴都(河北省)青蓮寺の僧・大愚の贈答詩が、北漢の巻に録され²¹ている(北漢3-1、北漢3-2)。北宋・劉道醇『五代名画補遺』山水門、荆浩条に記される逸話で、「千澗の水を求めず、止だ両株の松を要す」と当時流行の双松図を描いて欲しいという大愚に対して、荆浩は「意を恣(ほしい)ままに縦横に掃けば、峰巒は次第に成る」として、山水画を描き贈ったことが知られる。契丹の貴族の墓から発見された「山奔候約図」(遼寧省法庫県葉茂台7号遼墓出土、遼寧省博物館、図8)は、同地の画家の手になるとみられるものの10世紀後半の作と考えられており、渴筆を縦方向に滑らせる皴法に、荆浩に代表される華北山水画の影響を見ることができる²²。



図6 「鷺鳥水禽図(紫檀槽琵琶捍撥)」(正倉院南倉)

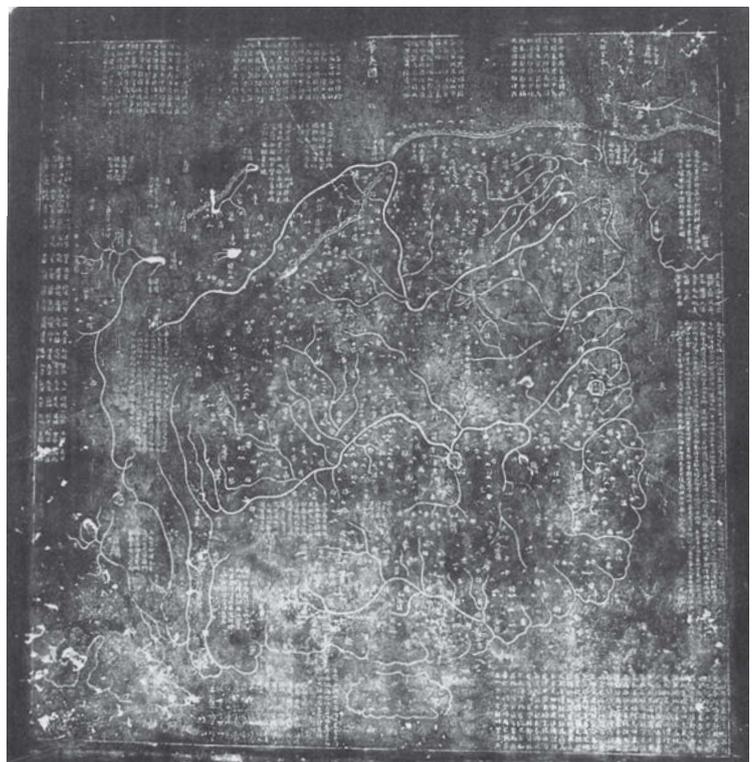


図7 「華夷図石刻」(陝西省博物館)



図8 「山奔候約図」(遼寧省法庫県葉茂台第7号遼墓出土、遼寧省博物館)

(5) 周 (巻15～17)

後漢の樞密使(軍政の最高責任者)であった郭威(太祖、在位951～54)は、後漢の隠帝が反乱で殺されると、配下の軍人に擁立されて即位し周(951～60)を建てたが、3年で病没した。跡を継いだのは皇后柴氏の兄柴守礼の子・柴榮(世宗、在位954～59)で、五代第一の名君と称される。北漢、後蜀、南唐との抗争を有利に進め、中国再統一への道筋をつけたが、契丹から燕雲十六州の奪回をめざした出兵中に39歳の若さで病没した。統一の大業は、彼の部下であった趙匡胤(太祖、在位960～76)を初代とする北宋(907～1127)において達成されることになる。

絵画に関する詩は多くは残っておらず、題画詩としては起居郎を務めた韋遵(生没年不詳)「題施璘画竹図」(周1-1)が録されるのみである。当時、竹を描いて画名のあった施璘の「竹図」について詠っており、「千竿」と称される竹叢が清流に映え、荆湘の秋の風情を漂わせていたという。出典は『五代名画補遺』花竹翎毛門で、著者の劉道醇が実見した「十幅竹図」に留められていた詩である。

以上、華北の五王朝を総覧すると、宮廷での作画に関する記録はほとんど見受けられず、文人の鑑賞の様子を具体的に伝える題画詩も多くはない。しかも詩文集ではなく、画史類に引用されることでかろうじて残ったものが目立つ。王朝の変遷が目まぐるしいなか、題画文学が低調だったことに加え、たとえ詩作がなされた場合も失われるものが多かったことが原因と推察される。

2 呉(巻18～23)、南唐(巻24～39)

呉(902～37)は、軍卒から成り上がった楊行密(太祖、在位902～05)が、景福元年(892)に淮南節度使、天復2年(902)には呉王に封ぜられたのが始めである。彼の没後は、配下の武将・徐温(862～927)が実権を握り、幼主を立て続けに即位させ王位の篡奪を図ったが達成直前に没し、養子の徐知誥が権力を継いだ。937年に呉から帝位を譲り受けて即位し、姓も本姓の李氏にもどして李昇(烈祖、在位937～43)と称し、唐の正統を継ぐことを標榜した。南唐(937～75)である。江蘇・安徽・江西といった江南の主要部を治め、高い農業生産力と製塩などの産業によって、十国のうち最強の国となり、文学や書画などの芸術も栄えた。子の李璟(中主、在位943～61)が跡を継ぐと、閩や楚を滅ぼし勢力を拡大したが、後周の世宗に長江以北の沿海部を奪われてからは衰退し、帝位を去ってへりくだらざるを得なかった。3代目の李煜(後主、在位961～75)も、国の存続を図ったが975年に北宋に都の南京を攻略されて滅亡し、李煜は開封へ移されて余生をおくった。

華北に比べれば政権が安定し、唐風の宮廷文化が持続・展開したことから、李煜(937～78、南唐2-伝)、韓熙載(902～70、南唐4-伝)、鄭文宝(953～1013、南唐11-伝)、唐希雅(生没年不詳、南唐13-伝)、薛媛(生没年不詳、南唐19-1)など、書画を善くした人物が散見され、題画詩や絵画を読み込んだ詩も多数伝わっている。

呉の張喬(生没年不詳)「鷺鷥障子」(呉4-4)は「画は為(つく)る江上糸を帯ぶるの禽」「引出す煙波万里の心」と、江中の白鷺を詠っており、「野逸」(『図画見聞誌』巻一「論黄徐体異」)と評される徐熙の江南花鳥画風を想起させる。

南唐で翰林学士、吏部尚書などを務め、北宋でも散騎常侍に任じられた学者・徐鉉(917～92)には、山水画を詠った「題画石山」(南唐6-4)²³がある。「彼の美なる巉巖の石」「絶壁爛として空に臨む」の句は聳え立つ岩山を、「羽客は書を洞に蔵し」「仙客去りて何(いず)くに通ず」の句は仙境を思わせる。董源・巨然の柔らかな披麻皴を用いた江南山水画の一般的な描写とは趣を異に

しており、当時の江南における山水表現の一端を伝える可能性もある²⁴。

また「送写真成処士入京」(南唐6-6)は、肖像画家の成処士が上京する際の送別詩で、転・結句では「都では多くの功臣があなたを待っているでしょうから、唐の太宗(在位626-49)が建国の功臣を凌煙閣に描かせたのと同様に彼らの肖像を描く労苦を厭わぬように」とはなむけの句を贈っている。

中主の時の状元で考功員外郎などを務めた伍喬(生没年不詳)については、先に「観華夷図」(南唐8-1)に言及したが、他にも山水について詠った「観山水障子」(南唐8-3)がある。「但だ見る江山長帯の春」「浪花岸辺の蘋を動かすが如し」の句は江南山水画らしい穏やかな水辺の風景を思わせ、末尾では「更に疑う独り漁舟を泛ぶる者、便ち是其の中旧隠の人」と画中の人物に隠逸の思いを寄せている。

建陽(福建省)の出身で廬山(江西省)の白鹿洞書院に学んだ江為(生没年不詳)は、科挙には及第せず、呉越国に亡命しようとしたことが発覚し処刑された不遇の士で、彼にも「観山水障歌」(南唐16-1)がある。この図も「万里の江山其の上に在り」というように、江南山水画を想起させる広々とした水景を伴っており、「孤帆混漾として風勢を張る。魚を釣る老翁伴侶無し」さらには「片雲」「双鶴」「垂柳」「樵人」といった点景モチーフも描き込まれていたようである。

3 前蜀(巻40-56)、後蜀(巻57-60)

前蜀(907-25)は、無頼の徒から黄巢討伐に加わり蜀地方の節度使となって勢力を拡大した王建(高祖、在位907-18)が、朱全忠の梁建国に対し、自らも帝位に即いたのが始まりである。天然の要害としての地の利と資源に恵まれ、唐末に僖宗(在位873-88)が乱を避けて行幸したこともあって、唐の遺風を受け宮廷文化が花開いた。彼の没後は実子と仮子で跡目争いが起こり、実子で末子の王衍(後主、在位918-25)が後を継いだ。放蕩で民心が離れ、後唐の荘宗に攻められ滅亡した。

後蜀(934-65)は、荘宗の重臣で蜀の統治を任された孟知祥(高祖、在位930-34)が、次第に独立化し、応順元年(934)に皇帝を称した。跡を継いだ子の孟昶(後主、在位934-65)も勢力を拡大したが、後周の世宗の攻勢を受け北宋に滅ぼされた。

唐末の詩人で晩年に王建に仕え宰相となった韋莊(836?-910)に、「金陵図」(前蜀5-3)があり、南朝の都がおかれた金陵(江蘇省南京)の盛衰に思いを馳せている。「君見るや六幅南朝の事、老木寒雲故城に満つ」の句から、屏風のような大画面であったと考えられ、樹

木等の山水的な要素もあったとみられる²⁵。後述する荆南の齊己も「看金陵図」(荆南2-29)を詠んでおり、当時流布していた画題であったことをうかがわせる。

宮廷における肖像画・彫刻制作の点で興味深いのは、高祖・王建の像を后妃が詠んだ、太后徐氏(?-926)「題謁丈人觀先帝聖容」(前蜀8-1)、太妃徐氏(?-926)「謁丈人觀先帝御容」(前蜀9-1)である。王建の没後に、姉妹である后妃²⁶が、蜀の道教の聖地・青城山の道観である丈人觀に奉安されていた王建の像を詠んだ詩²⁷である。王建は生前から肖像画・彫刻を多数制作させており、その墓からも石像(図9)が発見されている²⁸。本詩もそのような王建像の記録の一例であり、舜帝が蒼梧の野(湖南省)に崩じた際、後を追ってきた二妃が湘水に至り落涙した故事²⁹が踏まえられている。

詩僧、画僧として知られる禅月大師・貫休(832-912)は、題画詩も複数残している。婺州蘭溪(浙江省)の人で、若くして出家し、浙江、江蘇、江西、湖北などの長江中下流域で修行した。晩年の天復3年(903)に蜀(四川省)に行き、王建より禅月大師の称号を賜り、龍華山東禅院に住した³⁰。

画は、唐以来の潑墨画の粗放な水墨表現に影響を受け、



図9 「王建像」(四川省成都市、王建永陵)

「胡貌梵相」と評される奇異な「十六羅漢図」を描いた。彼の作った題画詩も、そのほとんどが道釈人物画に関するものである。李白像を詠んだ「観李翰林真」（前蜀7-6）、秦末の乱を避けて商山（陝西省）に隠れ住んだ四人の隠士への憧れを詠った「四皓図」（前蜀7-8）があるほか、『全五代詩』には未収録ながら「上馮使君渡水僧障子」（前蜀7-補1）、「観地獄図」（前蜀-補3）も道釈画に属する。このうち補1は、貫休が咸通年間（860～74）の末頃に桐江（浙江省）に住んでいた際、親交のあった同地方の太守・陸州刺史の馮巖に贈った詩³¹である。冒頭「跣足（はだし）にて巴藤を拄（つ）き、潺湲渡ること幾曾（たび）ぞ」の句から、裸足になって藤の杖をつき、水流を渡る僧の姿が描かれていたと分かる。このような図は、貫休の伝存作品には見当たらないが、唐から五代にかけての羅漢図の図様を受け継ぐ平安中期（11世紀）「十六羅漢図 第四尊者」（東京国立博物館〔聖衆来迎寺旧蔵〕、図10）にも見られ、貫休もそのような先行図様に習ったものと推察される³²。



図10 「十六羅漢図 第四尊者」（聖衆来迎寺旧蔵、東京国立博物館）

貫休は、夢に感得したとされる奇異な容貌の「十六羅漢図」をしばしば描いた。着色系の模本（御物本、金沢文庫本など、図11）が複数知られ、水墨の粗放な筆致の「羅漢図」（東京国立博物館、根津美術館、藤田美術館など）も伝わっている³³。前蜀、後蜀に仕えた欧陽炯（896～971）の「貫休応夢羅漢画歌」（後蜀6-1）は、同時代に彼の羅漢図を実見して作られた貴重な長詩である。詩題の注記は、五代の蜀地方の逸話を同地方の処士・景渙が綴った『野人閑話』を来源とする³⁴。それによれば、龍華寺に住した貫休が描いた「水墨羅漢一十六身并一仏二大士」には、巨石や雲、蔓の絡む枯松などとともに古貌な姿が狂逸な筆跡で描かれており、王建はそれを宮中で供養し、欧陽炯も詩を貫休へ贈ったという。詩では、まず貫休の高徳と水墨羅漢を夢に感得するや一気に描き出す様子を述べ、その後には羅漢の怪異枯瘦な姿や周囲の描写に言及している³⁵。「看経弟子」、「瞌睡山童」、「臥象」、「戲猿」などは御物本などの伝存作品には見られず、一仏二大士とも一具の制作だったこととあわせて、彼の画業



図11 （伝）貫休「十六羅漢図 第十六尊者」（宮内庁三の丸尚蔵館）

の集大成ともいえる晩年の大作であったと考えられる。

貫休の題画詩には、唐末に僖宗に従って蜀に入り、道釈人物や画水、松石を描いた孫位についての詩「題成都玉局觀孫位画龍」（前蜀7-補2）もある。孫位は、蜀地方の画事を綴った北宋・黄休復『益州名画録』巻上で唯一人、最高評価の「逸格」を与えられている画家で、「鷹犬之類、皆三五筆而成」という大胆な用筆で知られる。成都（四川省）の玉局觀にあった画龍を詠っており、「蟠屈する身長八十尺」の巨大な龍が、「頭は靦（み）る寒泉万丈の碧」というように奔流と共に描かれた勇壮な画面であったと思われる。

後蜀においても、前代に引き続き画院を中心に多数の画家が活躍した³⁶。次にあげる欧陽炯「題景煥画応天寺壁天王歌」（後蜀6-2）は、そのような蜀画壇の状況を具体的に伝えるものである。これも先述の『野人閑話』の記事を元にしており³⁷、題詠の経緯を知ることができる。それによると、孫位が応天寺の門の左壁上に描いた天王像は、筆勢狂縦で、三十余年それに敵う者は無かった。景煥（『野人閑話』の著者、景朴とも称した）は書画を善くし、欧陽炯と日頃から親交があった。或日、共に馬に乗って寺へ出かけ、（門の）右側の壁に天王を描いて対としたところ、欧陽炯は歌行一篇を作った。その後、草書を得意とする僧の夢亀が、これを廊壁上に書いたので、詩書画が一日のうちにでき上がり、成都の人はこれを「応天三絶」と称したというのである。詩はまず前半において孫位の画について「鬼神」、「地神」、「天女」などを連れた天王の勇壮な様を述べ、詩の半ばでは三十年間それに匹敵するものがなく、西壁が空いたままであったことを言い、後半では景朴の疾風の如き運筆によって描き出された迫力に富む天王像を讃えている。伝統に新たな制作が積み重なり、文学や書とも一体となって文化的な厚みを増していく蜀画壇の盛況を伝えており³⁸、北宋文人画の前史を考える上でも貴重な事例と位置づけられる。

後蜀の画院画家・黄居宥の山水画について詠う徐光溥（生没年不詳）「題黄居宥秋山図」（後蜀2-1）も、五代における文化の一中心であった蜀の状況を示す好例である。本詩は『益州名画録』巻中、黄居宥条に収録されており、図の制作経緯も記されている。通好を求めてきた淮南（南唐）への返礼の品として、蜀主の命を受けて父の黄筌とともに制作した画題の一つが「秋山図」だったが、制作期限に間に合わず、内府にあった同題作品を贈ることにした。一方、新たな「秋山図」は月を経てようやく完成したが、以前の作よりも優れていたため、翰林学士の徐光溥が、詩を作って献上したのがこの「秋山図歌」であるという。六十句からなる長詩で、とくに前半部分に図の描写に関する内容が多く、重なり合う秋の峰々の間に「珍禽異獸」、「奇花怪木」のほか、草を食む

牛、橋を渡る僧、暮煙にかすむ村、一葉の舟などの風物が描き込まれていたようである。山水画に花鳥の表現が織り交ぜられていた点は、李思訓、李昭道に代表される唐代青緑山水の余韻と言え、北宋後期以後の青緑山水においても花鳥が点景モチーフとなっていく先蹤として注目される。なお、後蜀滅亡後、黄居宥は父とともに北宋に登用され、その豊麗な花鳥画風を画院に伝えることになった。『益州名画録』によれば北宋が南唐から接收した名画を彼が観覧した際に、蜀が南唐に贈った「秋山図」があり、黄居宥の言葉通り画絹の縫い合わせの内側には彼の署名があったという³⁹。蜀の文化が、五代において江南とも交流をもち、さらには北宋にも影響を与えていったことを象徴的に示す事例となっている。

4 その他の国々（南漢、楚、呉越、閩、荆南）

(1) 南漢（巻61）

南漢（909～71）は、広東地方で黄巢の乱の防御に功のあった劉謙の子の劉隱（讓皇帝、在位909～11）が、905年に清海軍節度使に任ぜられ、後梁の開平三年（909）に南平王、乾化元年（911）に南海王に封ぜられたのに始まる。この地方には、高級官僚で失脚して流されてきたものも多く、さらには乱を避けて移住する人士も多かったため、彼らを登用し、この時代に珍しい文官統治の国となった。劉隱の没後は弟の劉龔（高祖、在位911～42）が継ぎ、乾亨元年（917）には帝号を称し、翌年、国号を漢とした。第4帝・劉晟（中宗、在位943～58）の時に楚を攻めて領土を拡大したが、5代の劉鋹（後主、在位958～71）は宦官を重用し、開宝四年（971）に北宋に滅ぼされた。

画に関するエピソードは、宰相の黄損（生没年不詳）が官を辞めて隠遁した後、家族はその肖像画に仕えたという逸話（南漢1-伝）が録されるのみである。

(2) 楚（巻62～65）

楚（907～51）は、木工から身を起こした馬殷（武穆王、在位896～930）が、湖南地方に勢力を築き、乾寧三年（896）には湖南節度使に任ぜられた。907年に後梁が成立すると楚王に封じられ、その後も、五代政権に臣従の態度を取り続けた。呉（南唐）や南漢という強国と国境を接していたことと、特産の茶の最大販路が華北だったことが理由である。馬殷の死後は、身内の権力抗争で国力を消耗し、広順元年（951）に南唐によって滅ぼされた。

題画詩には、裴諧（生没年不詳）「観修処士桃園図歌」（楚4-4）がある。修処士は逸伝の画家であるが、「一たび天宝に王維死して従（よ）り、今に於いて始めて修夫

子を見る」と、唐の王維と比べ、「憐むに堪う彩筆の東風に似たるを、一朶一枝手に随いて発す」と東風が花を咲かせるように、桃の花を巧みに描き出す様を述べ、「工夫妙麗にして実（まこと）に寄絶」と讃えている。

(3) 呉越（巻66～74）

塩の密売人から軍卒となり、黄巢の浙江侵攻を撃退するのに活躍した錢鏐（太祖、在位907～32）は、浙江から蘇州に勢力を伸ばし、唐末には越王に、開平元年（907）には後梁の朱全忠から呉越（907～78）国王に封ぜられた。呉、南唐、閩と国境を接していたため、第2代の錢元瓘（世宗、在位932～41）以降も華北の五代王朝に恭順して国の保全を図るとともに、遼や高麗、日本とも通交した。仏教への信奉が厚く、とくに最後の王である第5代の錢俶（錢弘俶・忠懿王、在位948～78）の八万四千塔の鑄造は有名である。北宋の統一政策に抗しきれず、太平興国三年（978）に領土を献上したため優遇を受け、子孫は宋に文人官僚として仕えた。

王族には錢俶（呉越1－伝）をはじめ、書画を善くしたと伝えられる者が並ぶ（錢惟治〔呉越2－伝〕、錢昆〔呉越3－伝〕、錢易〔呉越4－伝〕）。

錢鏐に仕えて節度使や給事中を務めた羅隱（833～910）には、先述の「八駿図」（呉越5－7）のほか、扇面に描いた牡丹を詠った「扇上画牡丹」（呉越5－5）がある。また、伝記中にある「題礪溪垂釣図」（呉越5－伝）は、『十国春秋』巻八四に見られる逸話で、錢鏐が羅隱に画賛を求めた際、西湖の魚にかけられていた漁業税への批判を込めた詩とされる。

(4) 閩（巻75～87）

閩（909～45）は、唐末の流賊から身を起こした王潮、王審知の兄弟が福建に建てた国である。乾寧三年（896）に王潮（在位896～97）が威武軍（福建）節度使となり、翌年に王審知（太祖、在位897～925）が地位を継いだ。唐の滅亡後は後梁に入朝し、開平三年（909）に閩王に封ぜられた。王審知は内政に取り組み、文人の流入も多く、後進地であった福建開發の端緒となったが、その後は一族の権力闘争が続いた。龍啓元年（933）、4代目の王延鈞（在位925～35）のとき後唐との主従関係を絶って帝号を称したものの、その後、南唐に攻められ滅亡した。

開国伯王延彬の記事（閩1－伝）は、詩を得意とした彼が、妓女を召す際に、自分の肖像に詩を添えて送ったという『五国故事』下に見える逸話である。

唐朝の文人で閩に身を寄せた一人である韓偓（842～914？）は、書も善くし、詩中には書画に関する句がしばしばみられる。「商山道中」（閩2－6）は、商山（陝西省）の旅路の風景を見て、曾てみた粉本（絵手本）を思

い出しつつ「始めて知る名画に工夫有るを」と結ぶ。「建溪灘波心目驚眩余平生溺奇境今則畏怯不暇因書二十八字」（閩2－8）では、盛唐の宗室画家で、青緑山水の著名な李思訓に、「荷花」（閩2－10）では中唐の仕女図の名手の周昉に言及する。

閩に仕え掌書記となった徐夔（生没年不詳）も、書画・文房具・工芸に関する詩を多数作っている。「詠写真」（閩3－2）は、自分の肖像画がよく真を捉えていることを述べた上で、若くに従軍した経験と、老年になっての科挙受験⁴⁰を思い、末尾では風采は李白にも劣らないと自負を述べている。「画松」（閩3－9）は、唐代後半から流行した松石図⁴¹の例で、結句の「天台（浙江省）の道士頻りに来たりて見、株々赤城に倚るに似たるを説く」からも江南で鑑賞されたことが分かる。

(5) 荆南（巻88～99）

荆南（907～63）は、朱全忠の部下の高季興（武信王、在位907～28）が、華北、江南、蜀を結ぶ長江中流域の要地・江陵府に拠る荆南節度使に任ぜられたのに始まる。同光3年（925）に後唐から南平王に封ぜられ、以後、五代の諸王朝、さらに南漢、閩、後蜀にも臣従の態度をとり、流通の一大拠点として繁栄したが、北宋の統一策には勝てず、乾隆4年（963）に併合された。

表に採録した尚顔（生没年不詳）、齊己（864～943？）は、ともに詩僧で、江陵周辺にとどまらず、江南を中心に広く活動し、各地の文人と交流をもった。中でも齊己は、多数の名士との交友があったことが贈答の詩から分かり、この時代の絵画史を考える上でも注目される人物の一人となっている。その伝記（荆南2－伝）にも引かれるように、湖南の寺院の佃戸の家に生まれ、幼少から寺の牧童をするかたわら竹枝で画牛を描いていたといい、書も善くした芸術肌の人物で、詩中には芸術に関する記事が頻出する。題画詩も多数詠んでおり、人物画では、「謝人惠十才子図」（荆南2－28）がある。十才子は、中唐の大暦年間（766～79）に活躍した盧綸らの所謂大暦十才子を描いたものかと考えられる⁴²。「醉舞離披するは真に鶯鶯、狂吟崩倒するは瑞なる麒麟」は痛飲の形容であり、現存する高士の群会図において酔態が描かれる先蹤として注目される。

「題画鶯鶯兼簡孫郎中」（荆南2－19）は、鶯を蒲や蘆の生える江水の中に描いた花鳥画で、尾聯の「思量す画を得るは籠を得るに勝ると、野性由来人を恋わず」は、俗世の煩いを望まない自らの心境をも込めているよう。

「観李瓊処士画海濤」（荆南2－2）は、波の逆巻く様を描いた波濤図である。瓊処士については、画史にもその名が見えず不明であるが、「巨鼈転側し長鱗は翻えり、狂濤顛浪高きこと漫漫」「混漾たる崩騰大鯨の臬。葉撲の仙

様擺（ふる）いて沈まんと欲す」などの句にみえる激しい海水の描写は、唐代に流行し白居易「題海図屏風」詩などにも詠われた海図⁴³の伝統を引き継ぐものである⁴⁴。

山水画については、「謝興公上人寄山水簇子」（荆南2-9）、「寄上荆渚因夢廬嶽乃因壁賦詩」（荆南2-11）、「謝重縁旧山水障子」（荆南2-15）の3首がある。このうち2-9は、簾と思われる画面に描かれた山水画を、興公上人という僧から贈られたことに対する返礼の詩で、尾聯において「知る君遠く相恵むを、我山に帰るを憶うを免がる」と帰隱の思いが慰められたことを述べる。2-11は、かつて遊んだ廬山を夢に見、それを自ら壁画に描き詩を賦したもので、末尾で「帰心幾時にか遂げん、日（ひび）向かう漸く衰残」と、老いの迫る中で募る帰山への願いを吐露している。2-15は、再表装された古い山水畫の衝立を見せてもらったことに謝意を述べた詩で、「公子の鑑に因らずんば、零落幾（ほとん）ど塵と成らん」の句からみて相手は名門の子弟だったようである。

このように、齊己は山水画に強い関心を持っており、古画から同時代の作品、さらには自作の画にも詩を添えている。その中であって注目されるのが、「寄顧処士」（荆南2-6）である。冒頭で「半年離別の夢、来往するは即ち湖辺」と半年会えなかった交友に触れ、頷聯においては「兩幅関山の雪、尋常眼前に在り」と関山の雪景を描いた画を日頃から愛玩していることを述べる。その上で、「項容」、「張藻」、「藍淀」の三画家⁴⁵を引き合いに出していることから、顧処士は画家であると考えられる。この顧処士は「寄顧蟾処士」（荆南2-20）の顧蟾と同一人物とみられる。首聯「久しく聞く客と為り蒼梧を過ぐと、説くを休（やめ）よ家を携さえて鏡湖へ帰るを」の蒼梧は湖南省の地名で、齊己の出身地域でもある。顧蟾はしばらくの間、同地を訪れていたが、故郷は鏡湖（浙江省）であった。鏡湖は、当時江南における水墨画の一拠点となっていた地域である。同地に住んだ晩唐の隱逸詩人・方干（809～88?）の詩には、陳式、項信、盧卓、項洙、陸山人など複数の水墨画家とその作品が詠われ、項信、項洙らは先述の項容の一族であるとも考えられる⁴⁶。顧蟾にはその鏡湖へ帰る意思もあったが、齊己はそれを止めよといひ、頷聯において「山水の顛狂は応さに在るを尽くすべし、鬚毛凋落するも貧無を免れん」と助言している。齊己は晩年の方干に「寄鏡湖方干処士」（荆南2-5）を贈っており、顧蟾への励ましも方干周辺の水墨画家の後裔との認識に基づいてなされたと推察される。

先述の貫休には、「贈方干」（前蜀7-9）、「春晚訪鏡湖方干」（前蜀7-15）があり、方干との交流がより深く認められる。一時、鏡湖付近に住んで頻りに訪問し、彼の粗放な筆致の水墨羅漢には、この折の影響が想定されている⁴⁷。また、「上馮使君山水障子」（前蜀7-16）は、貫

休が廬山などを経て桐江（浙江省）に移ってから、陸州刺史の馮巖に山水畫の屏風を描き贈った際の詩であるが、「崩岸は全く路を隳（やぶ）り、荒村は半ば煙有り」、「遠浦は深く海に通じ、孤峰は冷たく天に倚る」などの描写に加えて「画を出しては王墨を欺く」とあるように、中唐の潑墨画⁴⁸にも通じる闊達な水墨による作品であったとみられる。

このように、詩人、画家が長江流域を横軸とする広大な地域を移動し、交流を深めていたことは、五代十国時代の絵画の主題内容や表現様式、鑑賞状況などとも結びつく非常に興味深い問題である。その中であって、本表を作成したことによって特に注目される地域として廬山が挙げられる。齊己が夢に廬山をみて、それを壁画としたことは先述したが、彼にはほかに「假山〈并序〉」（荆南2-17）があり、その序文には、その壁画に倣い廬山への思いを込めて盆景である假山を作ったことが語られている。

廬山は東晋の慧遠ゆかりの古刹・東林寺があり、陶淵明、李白、白居易らの詩跡としても知られ、本表にも孫魴「廬山瀑布」（呉2-1）、李中「題廬山東寺遠大師影堂」（南唐9-6）など、しばしば廬山周辺に関する詩が見られる。また南唐の国学・白鹿洞書院も廬山の東麓に置かれ、南唐ではここに学んだ人物も多い⁴⁹。このような文化の拠点としての廬山の性格を考えた時、董源・巨然に端を発する江南山水畫との関連性が、改めて注目されてくる。

南宋・劉宰『京口耆旧伝』卷一、刁衍伝の注には、南唐の後主が廬山に精舎（開先寺）を作り、その様子を董源に命じて描かせたという故事が記されている⁵⁰。地理的に見ても廬山の東南には、中国有数の大湖である鄱陽湖があり、長江も北側を流れる水の豊かな土地である。江南山水畫の成立における重要な素地として、廬山、長江、鄱陽湖に注目⁵¹すれば董源と巨然の伝称作品の間にみられる画風差についても解明の手がかりが得られるのではないかと考えるが、既に予定の紙数を越えており稿を改めて論じることとしたい。

おわりに

『全五代詩』に見える絵画関連の詩を抽出整理して、そこから見える五代十国の絵画状況を考察した。国ごとに見ていくことで、絵画はもとよりその背後にある文化状況についても垣間見ることができたと思う。大きな傾向としては、交代の激しかった華北の五王朝の資料はやはり少なく、政情が比較的安定していた江南や蜀のほうがより資料にめぐまれていることを再認識する結果となった。

問題点が多岐にわたり、個々の資料を深く分析する余裕がなかったが、それらの点については今後の課題としたい。継続中の北宋文人士大夫の詩文集の分析にも、本研究は前提となる。今回得られた知見を向後の研究に反映させられるよう期して、ひとまず稿を閉じることとする。

註

- 11 採録方針、凡例は、拙稿『全五代詩』にみえる絵画関連資料1』（『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』60号、2016年）2～3頁を参照。なお、新たに第1列（最左列）に用いた「補」の表記は『全五代詩』に未収録の題画詩をさす。
- 12 唐代の題画詩を網羅的に収録し注解を加えた書に、孔寿山『唐朝題画詩注』（四川美術出版社、1988年）があり参考となった。また、五代各国の沿革については、『世界歴史大系 中国史 3 五代～元』（山川出版社、1997年）を参照した。
- 13 以下、本稿で取り上げる詩については、その作者が、表における当該国の何番目に記載されているかを国名とともに挙げ、第1列に付されたその詩の記事番号とともに括弧内に表示する。検索の際は、本文各節の冒頭に国ごとの巻数を示したので、それも目安にされたい。
- 14 『貞観公私画詩』「右八巻、史道碩画、隋朝官本」の一つとして「周穆王八駿図」が、「右二巻、史祭画」の一つとして「穆天子八駿図」が著録されている。『歴代名画記』巻五、晋、司道碩条および、巻六、宋、史祭条に「八駿図」が録され、巻九、韓幹条にも「古人画馬有八駿図、或云史道碩之迹、或云史秉之迹。皆螭頸龍體、矢激電馳、非馬之状也」とある。『唐朝名画録』神品下、韓幹条には「且古之画馬、有穆王八駿図、後立本亦模写之、多見筋骨、皆擅一時、足為希代之珍」とする。『図画見聞誌』巻五、故事拾遺「八駿図」には、詳しい記載があり、周・穆王の時の画を、晋・司道碩が模写し、歴代の王朝が所蔵したことや、八頭の名称と特徴等を述べている。『宣和画譜』巻十三、畜獸一、晋、史道碩条に「八駿図一」、同巻、唐、韓幹条に「八駿図一」を著録する。
- 15 唐代の詩文が先行例として挙げられる。白居易「八駿図戒奇物懲佚遊也」（『白香山詩集』巻四）、元稹「八駿図詩（并序）」（『元氏長慶集』巻三）、柳宗元「觀八駿図説」（『柳河東集』巻十六）。
- 16 王処直墓とその壁画については、河北省文物研究所、保定市文物管理处編『五代王処直墓』（文物出版社、1998年）を参照。
- 17 唐代の画鷹については、次の論考がある。黄立芸「呂紀「四季花鳥図 四幅」（東京国立博物館）を中心とする日中花鳥画の比較研究」（東京大学提出学位論文、2010年）、第一章「東アジア絵画における鳥の型の創成と伝承—鷹図を例として」。板倉聖哲「画鷹の系譜—東アジアの視点から」（『花鳥画—中国・韓国と日本—』奈良県立美術館、2010年）。
- 18 『図画見聞誌』巻二、郭乾暉將軍条、同巻、鍾隱条。『宣和画譜』巻十五、花鳥一、五代、郭乾暉条、同巻、郭乾祐条、巻十六、花鳥二、五代、鍾隱条。
- 19 『旧唐書』巻一三八、賈耽伝。また同書、巻十三、徳宗本紀、貞元十七年、冬十月条にも献上の記載がある。
- 20 「華夷図」については、次の文献を参照。曹婉如「有闕華夷図問題的探討」（『中国古代地図集 戦国～元』文物出版社、1990年）。『中国科学技術典籍通彙 地学巻第5冊』（河南教育出版社、1995年）、1193、1195頁。J.B.Harley ed. *The History of*

Cartography vol.2 Cartography in the Traditional East and Southeast Asian Societies, Chicago and London, 1994, pp. 46-47.

- 21 荆浩の出身地が現在の河南省北部、山西省に接する沁水（濟源）、または河内（沁陽）とされ、太行山脈の洪谷に隠棲したことに配慮したものと考えられる。荆浩の伝記については、馬增鴻「荆浩故里及生平新考」（『美術史論』1993年4期）が詳しい。
- 22 「山奔候約図」の歴史的位置については、小川裕充『臥遊』（中央公論美術出版、2008年）の本図解説（197頁）を参照されたい。
- 23 陳振孫『直齋書錄解題』巻十七では、徐鉉の詩文集である『徐常侍集』三十巻について、巻二十までは南唐に仕えていた際、巻二十一以降は宋に帰属後の作としている。『四庫全書』は徐鉉『騎省集』三十巻を収録し、提要（巻一五二）において「今勘集中所載年月事蹟、亦皆相符、蓋猶旧本也」とする。本詩は『騎省集』では巻二に録されており、南唐における作である可能性が高い。
- 24 南京市の東北近郊にある古刹・棲霞寺の仁寿舍利塔（隋創建、南唐重修）基壇に表された「釈迦八相浮彫」には、弧線の輪郭を反復した高峰の表現が「四天王奉鉢」「涅槃荼毘」などの場面に見られる。仏画の背景かつ石彫のこともあり、唐風の古拙な表現を踏襲していると見えるが、いずれにせよ南唐の山水表現の一例として興味深い。長岡龍作、解説「釈迦八相浮彫」（『世界美術全集 東洋編5』小学館、1998年）。丁明夷主編『中国石窟彫塑全集 第10巻』（重慶出版社、2000年）を参照。
- 25 北宋・米芾『画史』にも「隋画金陵図」に関する記述がある。東晋の顧愷之以来、江南系の樹木が一樣であったという見方はそのままには受け入れられないものの、「金陵図」の樹木表現とも関係する点で興味深い。
潁州公庫顧愷之維摩百補、是唐杜牧之摹寄潁守本者（中略）、其屏風上山水、林木奇古、坡岸如董源、乃知人称江南、蓋自顧以来皆一樣、隋唐及南唐至巨然不移。至今池州謝氏、亦作此体。余得隋画金陵図於畢相孫、亦同此体（後略）。（画品叢書本）
- 26 太后と太妃は共に徐耕の娘で、清・呉任臣『十国春秋』は、姉を順聖太后、妹を翊聖太妃とし、『全五代詩』もこの説をとる。しかし、後蜀・何光遠『鑑誠録』巻五「徐后事」は、姉を翊聖太妃、妹を順聖太后としており、この場合、伝記と詩の対応が入れ換わることになる。両者の宮詞を研究した浦江清「花蕊夫人宮詞考証」（『開明書店二十週年紀念文集』中華書局、1985年）も『鑑誠録』の説を支持している。119～125頁。
- 27 『全五代詩』は、太后徐氏「題謁丈人觀先帝聖容」（前蜀8-1）、「謁丈人觀先帝御容」（前蜀8-2）、太妃徐氏「謁丈人觀先帝御容」（前蜀9-1）、「題謁丈人觀」（前蜀9-2）を、清・鄭方坤『五代詩話』巻八から引用したとみられる。ただ、『五代詩話』の記事は、『鑑誠録』によるとされており、前註の「徐后事」がそれにあたる。両書の記述はほぼ同じであるが、「謁丈人觀先帝御容」（前蜀8-2）、「題謁丈人觀」（前蜀9-2）の両詩は『鑑誠録』では「題元都觀」となっている（『全唐詩』巻九はこれを採用する）ため、今回の考察からは除くこととした。
- 28 王建墓とその石像については、馮漢驥『前蜀王建墓發掘報告』（文物出版社、1964年）を参照。「王建造像」（38～39頁）には、『図画見聞誌』巻二、阮知晦条、『益州名画録』巻上、常重胤条など文献に見える王建像の記事も紹介されている。さらに、咸康元年（925）に王衍と太后、太妃が青城山にゆき、王建の鑄造に謁したとする北宋・張唐英『蜀檮杌』巻上の記

事（以下に引用）を挙げ、本詩との関連も指摘している。

（咸康元年）九月、衍与母同禱青城山（中略）、衍至青城、住旬日、設醮祈福。太妃太后、謁建鑄像。及丈人觀、元都觀、金華宮、丹景山至德寺、各有唱和詩刻於石。

- 29 舜が蒼梧の野に崩じたことは、『礼記』檀弓上、『史記』五帝本紀、二妃が湘水を訪れた故事は、西晋・張果『博物志』巻八、史補、梁・任昉『述異記』上にみえる。
- 30 貫休については、小林太市郎『禪月大師の生涯と藝術』（淡交社、1974年）が、伝記や芸術活動について詳細に考察されている。
- 31 「上馮使君渡水僧障子」については、小林氏、前註『禪月大師の生涯と藝術』159～160、349～351頁に詳しい。「画き来たって偏に好を覚ゆ」の句から本図が会心の作であり、貫休自身の作との見解を取っており、本稿もそれに従う。また馮使君の同定については、陶敏『全唐詩人名彙考』（遼海出版社、2006年）、1361頁の考証によった。
- 32 水を渡る羅漢の図像については、西上実「王維渡水羅漢図について」（『学叢』8号、1986年）、中村興二『十六羅漢図像学事始め』（萌書房、2011年）、第七章「渡水羅漢図と降龍羅漢図」がある。貫休詩についても、前者67頁に言及されている。
- 33 貫休「十六羅漢図」については、次の専論がある。小林氏、註30前掲『禪月大師の生涯と藝術』。長廣敏雄「御物・伝貫休画十六羅漢図考」（『長廣敏雄中国美術論集』講談社、1984年〔初出1978年〕）。
- 34 『全五代詩』では、この注記は『益州名画録』によるとするが、同書の巻下、貫休条には詩が録されているのみで、実際には『太平広記』巻二一四、貫休条の内容と合致する。『太平広記』の記事は蜀の処士・景煥の著作『野人閑話』から採られている。『野人閑話』は、後に散逸したが多くの書物に引用されており、『説郛』にはそれらを採録する形で若干の文が収載されている。小林氏、註30前掲『禪月大師の生涯と藝術』、318頁を参照。
- 35 本詩の解釈および実作品との関係については、小林氏、註30前掲『禪月大師の生涯と藝術』が詳しい。316～321、355～356頁。
- 36 蜀地方の画事については、高橋善太郎「五代四川地方に於ける絵画発展の背景と道釈人物画について—五代四川絵画の発展 上—」（『愛知県立女子大学 愛知県立女子短期大学 紀要』10輯、1059年）、同氏「十世紀四川地方に於ける花鳥画の盛行と山水画—五代四川絵画の発展 下—」（『愛知県立女子大学 愛知県立女子短期大学 紀要』11輯、1960年）が概略を述べている。
- 37 『太平後記』巻二一四「応天三絶」がこの逸話を収録しており、『野人閑話』からの採録と記している。なお、蔣詒恭「題張道隱太山祠画龍」（後蜀4-1）も、蔣詒恭の伝（後蜀4-伝）に記載があるとおり、『野人閑話』を出処としている（『説郛』収載の「野人閑話」にも「書画八人」として収録されるが、テキストとしては北宋・阮閱『詩話総龜』巻二十一の引用のほうがよい）。「野人張道隱」ら、蜀地方の8名の書画家に触れたあとの後半部分に、「野人」が画龍を善くし、「龍証筆訣三卷」を著して太山府君祠に龍を描いたとする逸話が記され、本詩も引かれる。ただ、この「野人」が、張道隱を指すのか、『野人閑話』の著者である景煥その人を指すのかについては、解釈が分かれている。『全唐詩』、『全五代詩』は張道隱とするが、より時代が近い北宋・郭若虚『図画見聞誌』巻六は、「応天三絶」の故事を引く中で、景煥が画龍を好み「画龍之事」を叙したとする。このように、本詩の「太山祠画龍」の作者については、解釈が分かれ特定も困難なため、ここで

は判断を保留し、蜀の絵画の状況を伝える資料の一つとして紹介するにとどめることとする。

- 38 ただし孫位に最高の評価を与える『益州名画録』孫位条において本逸話を紹介した上で景朴（景煥）の画を、「識者比之蹄涔巨浸、未万分之一焉」と評している。
- 39 この「秋山図」の故事は『図画見聞誌』巻六「秋山図」にも録され、太平興國中（976～84）の「秘閣曝画」の折とされている。北宋内府への、全国の文物の蒐集については、塚本磨充『北宋絵画史の成立』（中央公論美術出版、2016年）が詳しく、「秋山図」についても言及がある。155頁。
- 40 詩中の「東堂」は、晋の郗詵が宮中の東堂において試験を受けたこと（『晋書』巻五十二、郗詵伝）から、試験場を指し、「射策」も漢代の試験の一つ（『漢書』巻七十八、蕭望之伝）であることから、孔氏、註12前掲『唐朝題画詩注』は、本詩を科挙受験及第の際の詩と解している。389～390頁。
- 41 松石図については、拙稿「唐代の樹石画について—松石図を中心に—」（『古文化研究』5、7号、2006、2008年。拙著、註1前掲『唐宋山水画研究』所収）で詳述した。
- 42 大曆十才子の画像については、『旧唐書』巻一六八、錢徽伝に、「大曆中、与韓翃、李端輩十人、俱以能詩、出入貴遊之門、時号十才子、形於図画」とあり、『図画見聞誌』巻二、唐末、梅行思条に「十才子」が、『宣和画譜』巻二、道积二、唐、常棣条に「十才子図二」が著録される。
- 43 海図とその後の波濤図の展開については、拙稿「唐代の海図—その主題内容と絵画史上の意義をめぐって—」（『古文化研究』2号、黒川古文化研究所、2003年。註1前掲『唐宋山水画研究』所収）を参照されたい。
- 44 波濤図は龍とも関係が深く、龍水として一括して扱われることもある。『全五代詩』未収の「謝徽上人見惠二龍障子以短歌酬之」（荊南2-補1）は、五洋（広東省）の画僧・徽上人の画龍を、貫休の「題成都玉局觀孫位画龍」（前蜀7-補2）を引用しつつ詠ったものである。
- 45 項容は、潑墨画家の王黙（墨）の師とされる天台の処士（『歷代名画記』巻十）。張藻（藻）は、中唐の樹石画の大家（『歷代名画記』巻十、『唐朝名画録』神品下）。藍淀は逸伝の画家。
- 46 方干の題画詩については、孔氏、註12前掲『唐朝題画詩注』、356～365頁が詳しい。また拙稿、註2前掲『唐代山水画の主題に関する研究』においても触れた。項信、項洙の画系は、島田修二郎「逸品画風について」（『島田修二郎著作集2 中国絵画史研究』中央公論美術出版、1993年〔初出1951〕）、11頁に言及がある。
- 47 小林氏、註30前掲『禪月大師の生涯と藝術』、123～125頁。
- 48 王墨と潑墨については、島田氏、註46前掲「逸品画風について」を参照されたい。5～8頁。
- 49 伍喬（南唐8）、李中（南唐9）、陳旼（南唐15）、江為（南唐16）、劉洞（南唐17）の略伝を参照されたい。
- 50 『京口耆旧伝』巻一、刁衍伝
原注、李後主少時、遣人於廬山精舍拈爽塲地為精舍、極一時林泉之勝。既成、命宮苑使董源以澄心堂紙写其図來上。既即位、以精舍為開先寺、以図画尽賜刁衍、藏於家。蔡天啓之子佑猶及見之。（江蘇大学出版社本）
- 51 2016年8月16日から21日まで、廬山および南昌周辺の自然と旧跡を調査し、その概略を拙稿「夏の廬山を訪ねて—山水画研究旅行記—」（『美』200号、2016年）にまとめた。

【図版出典】

図5 『五代王処直墓』（文物出版社、1998年）。

図6 『正倉院の絵画』（日本経済出版社、1968年）。

図7 『中国古代地図集 戦国—元』（文物出版社、1990年）。

- 図8 『世界美術大集 東洋編 第5巻』(小学館、1998年)。
図9 前掲『世界美術大集 東洋編 第5巻』。
図10 『羅漢－その美術と信仰－』(滋賀県立琵琶湖文化館、1994年)。
図11 『日本美術全集6』(小学館、2015年)。

